

天理市埋蔵文化財調査概報

昭和63・平成元年度（1988・1989年）

1992

天理市教育委員会

序 文

本市における埋蔵文化財行政は、遺跡の発掘調査事業が主体となり、その規模、件数も増加の一途をたどっています。ここには、文化財の保護と開発という二律背反する宿命があります。しかし、地下深く埋没していた遺跡であっても、重要な意義のあるものは開発側と協力して保存して行かなければならぬものと言えます。

本概報においては、昭和63年度、平成元年度において天理市教育委員会が実施した調査のうち、国庫補助事業による報告以外の概要報告であります。

昭和63年度は6件、平成元年度は5件の調査について掲載しました。これらは事前調査のため十分な調査が実施されたとは言い難いですが、一つ一つの調査の積み重ねにより、本市のもつ歴史が解明されていくことを望むものであります。

最後にあたり発掘調査開始から終止御助言をいただいた奈良県教育委員会、権原考古学研究所、埋蔵文化財天理教調査団を始め関係諸位に深く感謝申し上げます。

天理市教育委員会

平成4年3月31日

教育長 上司幸男

例　　言

1. 本概報は、天理市教育委員会が、昭和63年、平成元年の2ヶ年に実施した遺跡の発掘調査のうち、昭和63年度分として、柳本藩邸遺跡（第4次）、長寺遺跡（第3次）、別所遺跡、荒蒔古墳（第1次）、黒塚古墳（第1次）と、平成元年度分として、布留遺跡（豊井地区）、荒蒔古墳（第2次）、小暮古墳（第2次）、黒塚古墳（第2次）、在原遺跡の調査の概要である。このうち両年度にまたがる調査についてはひとつにまとめて記述した。
2. 発掘調査は、泉　武、松本洋明が分担した。分担詳細は目次に明記した。遺物の整理には、山田圭了、滝本富美子、糸　信子が補佐した。
3. 本概報の執筆は調査担当者が分担し、編集は泉が行った。出土遺物、現場写真、実測図などは本教育委員会が保管している。

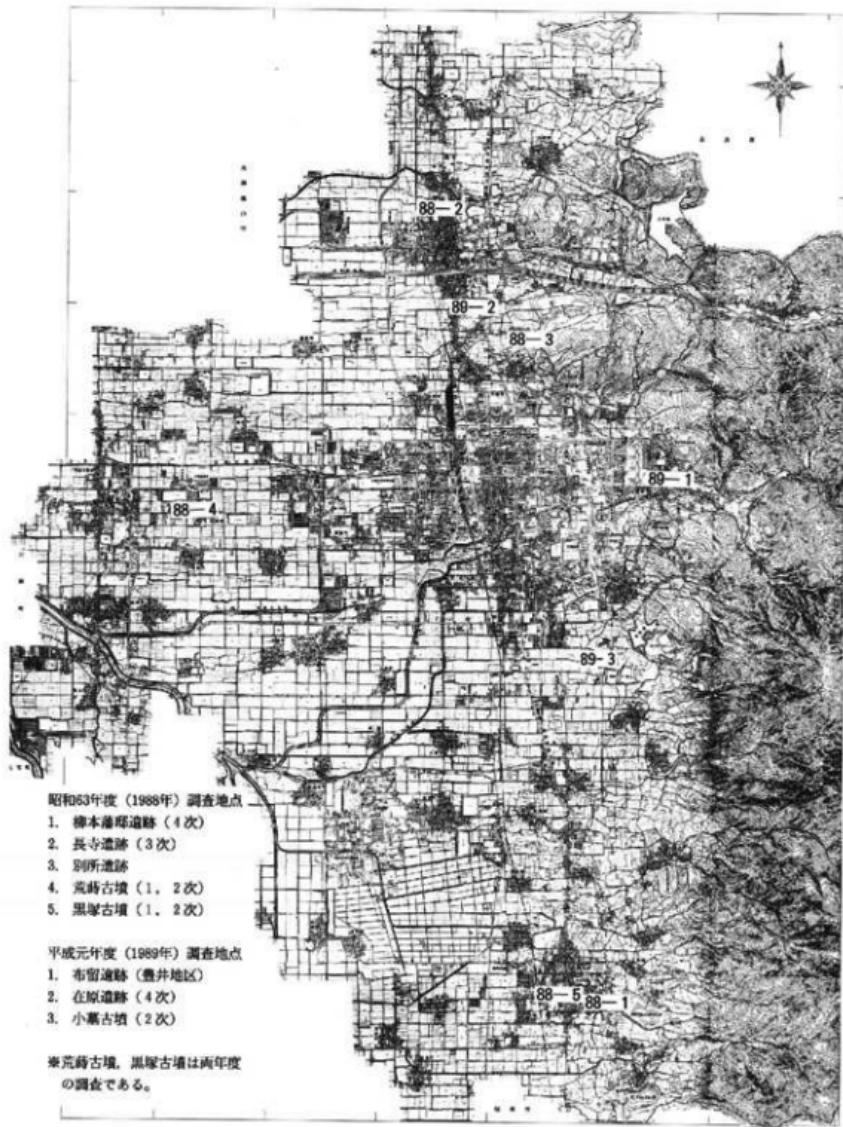


図1 昭和63年度、平成元年度遺跡調査地点



目 次

昭和63年度（1988）

1. 柳本藩邸遺跡（第4次） (松本) ... 1
2. 長寺遺跡（第3次） (松本) ... 11
3. 別所遺跡 (泉) ... 26
4. 荒蒔古墳（第1次） (泉) ... 35
" (第2次) (松本) ... 35
5. 黒塚古墳（第1・2次） (泉・青木勘時) ... 39

平成元年度（1989）

1. 布留遺跡（豊井地区） (松本) ... 53
2. 在原遺跡 (泉) ... 60
3. 小墓古墳（第2次） (泉) ... 62

※ 荒蒔古墳と黒塚古墳の本年度分に調査については、昭和63年度において記述した。

図版目次

図版 1. 柳本藩邸	跡（第4次）	67
図版 2. 柳本藩邸	跡（第4次）	68
図版 3. 長寺遺跡	跡（第3次）	69
図版 4. 長寺遺跡	跡（第3次）	70
図版 5. 長寺遺跡	跡（第3次）	71
図版 6. 長寺遺跡	跡（第3次）	72
図版 7. 別所遺跡	跡	73
図版 8. 別所遺跡	跡	74
図版 9. 別所遺跡	跡	75
図版10. 別所遺跡	跡	76
図版11. 別所遺跡 井戸跡1出土土器（1）		77
図版12. 別所遺跡 井戸跡1出土土器（2）		78
図版13. 別所遺跡 井戸跡1出土土器（3）		79
図版14. 別所遺跡 井戸跡1出土土器（4）		80
図版15. 荒蔵古墳	埴（第1次）	81
図版16. 荒蔵古墳	埴（第1次）	82
図版17. 荒蔵古墳	埴（第2次）	83
図版18. 荒蔵古墳	埴（第2次）	84
図版19. 荒蔵古墳	埴（第2次）	85
図版20. 荒蔵古墳	埴（第2次）	86
図版21. 荒蔵古墳	埴（第2次）	87
図版22. 黒塚古墳	埴	88
図版23. 黒塚古墳	埴	89
図版24. 黒塚古墳	埴	90
図版25. 黒塚古墳	埴	91
図版26. 黒塚古墳	埴	92
図版27. 黒塚古墳	埴	93
図版28. 布留遺跡	跡（豊井地区）	94
図版29. 布留遺跡	跡（豊井地区）	95
図版30. 小墓古墳	埴（第2次）	96

図版31.	小 墓 古 墳	(第2次)	97
図版32.	小 墓 古 墳	(第2次)	98
図版33.	在 原 遺 跡	(第4次)	99
図版34.	在 原 遺 跡	(第4次)	100

挿 図 目 次

図 1.	昭和63年度、平成元年度遺跡調査地点.....	量
図 2.	柳本藩邸跡遺跡の位置図 (S=1/10000)	1
図 3.	調査区位置図 (S=1/2500)	2
図 4.	柳本陣屋絵図・嘉永7年(1854年)	3
図 5.	調査区西壁土層図.....	4
図 6.	近世末期の遺構平面図 (S=1/200)	5
図 7.	SD-03出土土器 (S=1/3)	7
図 8.	近世中葉～後葉の遺構平面図 (S=1/200)	7
図 9.	SE-01出土土器 (S=1/6)	8
図10.	SE-01出土土器 (S=1/3)	9
図11.	長寺遺跡調査地点位置図 (S=1/10000)	11
図12.	株本地区小字地図 (S=1/7500)	12
図13.	長寺遺跡の調査地点 (S=1/1000)	13
図14.	遺構平面図 (S=1/100)	15
図15.	調査区西壁断面図 (S=1/100)	18
図16.	SK-04出土土器 (S=1/4) 1.下層, 2.~10.上層.....	19
図17.	SD-02・04出土土器 (S=1/4) 1~7, 9須恵器, 8土師器, 10~13埴輪片	21
図18.	井戸SE-01平面・立面図.....	23
図19.	井戸SE-01出土土器 (S=1/3)	24
図20.	包含層出土の瓦 (S=1/3)	25
図21.	別所遺跡調査地.....	26
図22.	検出遺構と井戸跡1尖測図.....	27
図23.	土坑出土土器.....	28

図24. 井戸跡 1 出土土器(1)	29
図25. 井戸跡 1 出土土器(2)	30
図26. 井戸跡 1 出土土器(3)	31
図27. 荒蔵古墳第1・2次調査地点と検出遺構	35
図28. 黒塚古墳調査地位置図	39
図29. 北池、南池トレンチ断面図(1)	40
図30. 南池トレンチ断面図(2)	41
図31. 南池トレンチ断面図(3)	42
図32. 南池トレンチ断面図(4)	43
図33. 南くびれ部遺構検出平面図	44
図34. 北・南トレンチ配置と裾部推定地点	45
図35. 包含層出土土器実測図	46
図36. 布留跡(豊井地区)調査地点位置図(S=1/10000)	53
図37. 豊井地区・豊井前地点調査区位置図(S=1/2500)	54
図38. 遺構平面図(S=1/100)	55
図39. 住居跡出土土器(S=1/4) 1~2, SI-01出土3~6, S1-02出土	56
図40. SK-03出土一括土器(S=1/3)	57
図41. 在原遺跡調査地(第4次)	60
図42. 遺構検出平面図	61
図43. 第2次調査位置図	63

昭和 63 年度
(1988年)

1 柳本藩邸跡（第4次）——柳本町

I 調査の契機と経過

(1) 柳本藩邸遺跡について

天理市の南部、JR桜井線柳本駅の東側一帯には、かつての柳本藩の陣屋を中心に発達した城下町の町並が残っている。柳本駅から東へ500mに所在する天理市立柳本小学校は、かつて藩邸屋敷があった所で、現在でも校庭の西辺に残る堀跡や柳本黒塚古墳周濠の外辺部に石垣が残っており、藩邸時代のなごりを止めていている。

柳本藩に関する資料は、嘉永7年（1854）の近世末期に作られた「柳本陣屋絵図」^{注1}が残されている。この絵図と現在の地図とを比較すると、柳本黒塚古墳の北東側にある勤労身体障害者教養文化体育施設の天理サンアビリティーズの付近を陣屋の北限とし、柳本黒塚古墳の南西側にある柳本駐在所のあたりには西門（大手門）のなごりを残す石垣がある。また南限は、柳本小学校の南西100mにある柳本藩主織田氏の菩提寺にあたる専行院から大和天神山古墳西側にある伊射奈岐神社にかけて通る東西方向の市道を南端とし、伊射奈岐神社のあたりから北へ天理教の分教会にかけて



図2 柳本藩邸跡遺跡の位置図 (S=1/10000)

陣屋の東限を示す堀と土塁跡に係わる区画が現在の地割りにも残っている。よって柳本小学校の藩邸敷跡を中心にして、南北約350m、東西300mにわたって陣屋を築き家臣屋敷を並べていたことがわかる。

今回の調査は、天理市都市計画課が柳本小学校の北側、柳本公民館の東側隣接地において柳本公園の整備に伴う工事を実施することになり、同地点が藩邸跡の中心部にあたることから事前調査をおこなうことになった。調査は昭和63年9月6日～11月24日まで実施した。

(2) 問題点

柳本藩邸に係わる調査は、天理サンアビリティーズ建築に伴って樋原考古学研究所が昭和56年度に実施した第1次調査を初めとして(図3-1),昭和59年度と61年度には柳本小学校の改築工事

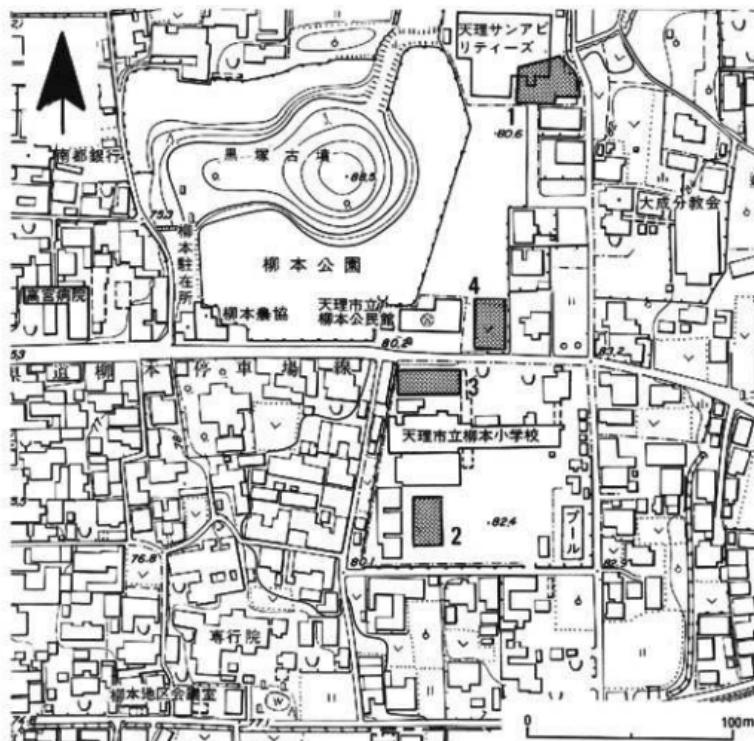


図3 調査区位置図(S=1/2500)

1. 昭和56年度調査地点
2. 昭和59年度調査地点
3. 昭和61年度調査地点
4. 昭和63年度調査地点

に伴う第2、3次の事前調査を天理市教育委員会が実施しており、今回は第4次目の調査になる。

—第1次調査— 柳本陣屋絵図(図4)が示す陣屋の北端部あたりでおこなった調査で、陣屋北門へ通じる通りの西側で「味岡五平」「味岡三朗兵衛」の家臣屋敷跡に位置していた。調査では近世の井戸跡3基、東西と南北に直行する小溝などを検出し、主に味岡五平屋敷跡を調査した可能性が高い。また中世の井戸跡や溝、掘り割りを検出しており、同地点が中世から近世にかけて継続的に遺構が展開している。

—第2・3次調査— 藩邸屋敷跡の中心部にあたる柳本小学校の校庭でおこなった調査である。この調査では嘉永7年(1854)の柳本陣屋絵図に関わる藩邸屋敷を築いた際の整地層を確認し、その下部に深さ2mにも達する18世紀後半から19世紀にかけての土器類を包含した複数の堆積層を検出している。水平な盛土がなされていた整地層に対して、その下部に堆積していた土層は南に傾斜した自然的な堆積状況を示し、現状の地形とはかなり違った景観が推測される。絵図と現状の地形に残る藩邸屋敷のプランが、この調査から近世末期に築かれた城郭であったことになる。たとえば文政13年(1830)から天保15年(1844)にかけて長期間にわたって藩邸の復興事業をおこなっているが、この事件が契機になって石垣を組んだ城郭を築いたとするならば、藩邸を石垣で区画した城郭期と、それ以前とに区別でき、柳本藩邸の歴史的評価に大きく影響する問題となる。



図4 柳本陣屋絵図・嘉永7年(1854)

註1 秋永政孝『柳本郷土史論』1940

註2 今尾文昭『黒塚東道跡』『奈良県道路調査概報・1981年度』1982

註3 泉 武『柳本藩邸跡』『天理市埋蔵文化財調査概報』1985、1986

II 調査の概要

(1) 基本土層(図5参照)

調査地点は、標高81.2~81.3mの南から北へゆるやかな傾斜をもつ所である。調査時には部分的に盛土(図5-1)がなされている。

耕土層(図5-2, 3)直下の暗灰褐色土(図5-4)は、10~30cmの平坦な堆積層で、砂混じりの硬くしまった土層である。同層内から19世紀頃の土器片が出土しており、藩邸時代の土層である可能性が強い。特に同層が堆積していたレベルが標高80.9~81.1mにかけて、柳本小学校校内を調査した第2次調査時に検出した暗オリーブ褐色土層からなる近世末期の整地層とレベル的に近似しており、同一の性格をもつ整地層であることが考えられる。暗灰褐色土層は、SD-03の南側一帯に広く堆積し、逆にSD-03や石垣を検出した調査区の北半部には見られない。

暗灰褐色層の直下には暗茶色の炭化物層があり暗灰色土(図5-8)は後の層位である。暗茶色炭化物層は、SD-03と04との間にあたる調査区の西端部に検出した局地的な堆積層で、非常に硬く踏みしまっている。いずれの上層からも18世紀後半から19世紀にかけての土器片が出土している。

近世遺構の直下で検出した茶灰色土(図5-7)は、SD-03から04にかけての間で検出した土層で、占墳時代の土器を包含していた黒褐色土の直上に堆積している。同層内からは17世紀頃と思われる土釜などの破片が少量出土している。断定できないが藩邸屋敷に係わる初期の整地上層と思われる。

占墳時代の包含層や地山層は基本土層図で表していない。しかし調査区南半部の東側では、標高80.5~80.8mぐらいで砂質土の地山層があり、また調査区南半部の西側では、茶灰色土(図5-16)

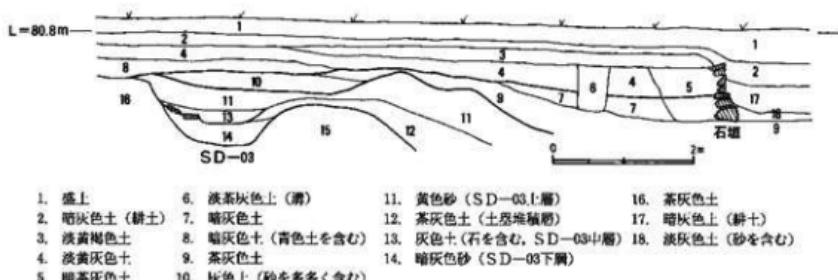


図5 調査区内地盤土層図 (S=1/80)

上面から約50cmぐらい下位で地山層がある。柳本小学校校庭の南半部では(第2次調査),標高79mぐらいまで近世土器が出土する包含層が堆積しており,それと比べて第4次調査地点は地盤が高い地点にあたる。ところが調査区北端部で検出した石垣のあたりは,標高78mあたりまで近世土器包含層が堆積する落ち込みがあり,調査区の北側に谷筋状の地形が推測される。

柳本藩邸跡の付近は,陣屋の形成によって平坦な地形に区画されているが,少なくとも近世後葉の18~19世紀までは,起伏の激しい谷筋が残る景観であったことが考えられる。

(2) 遺構

調査では17世紀から19世紀にかけての遺構を検出した。特に注意すべきところは,藩邸屋敷に伴う遺構の変化を時期的に比較することができる。概報では,遺構の変遷をかねて城郭を形成して石垣が築かれる“近世末期”谷筋に沿う形で土塁と溝が区画される“近世中葉～後葉”土塁が築かれる以前の“近世前葉～中葉”にわたって3期に区別した遺構とその様子を説明する。

1) 近世末期の遺構

近世末期の遺構は,近世中葉から後葉にかけて築かれていた土塁や土堀の南辺に沿って掘り込まれている溝SD-03が人為的に埋められ,城郭を区画した石垣を構築した時期の遺構を示す。この

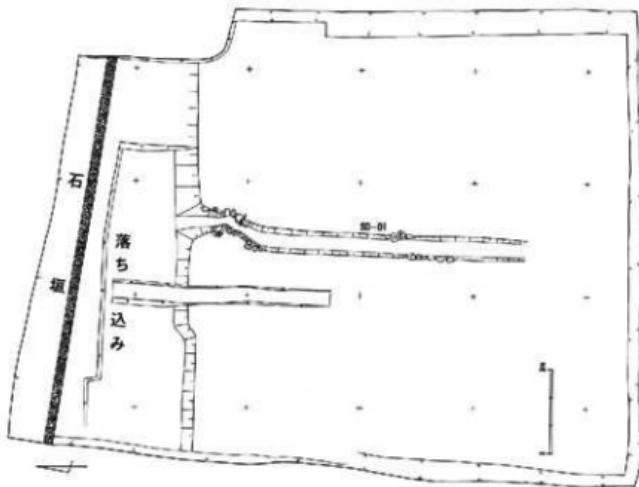


図6 近世末期の遺構平面図 (S=1/200)

時期は、さらに土壘と溝SD-03を埋めたてた直後の段階と、さらに土壘の北側を十盛して石垣を築く2段階に区別することができる。

一溝SD-01— 調査区の中央部で南北に検出した幅1~1.5m、深さ10~30cmの小溝で、北に向かって深く掘り込まれている。溝の側面を石組で造っていた形跡がある。また溝SD-01の北端部は、土壘が築かれていた時の水口を再利用して落ち込み（谷筋）へ流し込んでいたと思われる。石垣の完成後は水を流し込んでいた落ち込み部分が埋めたてられ、溝SD-01も廃止されたと考えられる。土壘と溝SD-03が埋めたてられた直後から石垣が区画されるまでの比較的短期間に機能していた溝と思われる。

溝内より18世紀から19世紀にかけての土器片が出土している。

一落ち込み（谷筋）— 土壘の北側一帯を示す。土壘が機能していた18世紀中葉から19世紀前葉にかけては、この部分が土壘の頂上部から2.5m以上にもなる深い落ち込みになっている。土壘を埋めもどした時点で落ち込みも埋めたてられ、1m程の浅い落ち込みに変わっている。その後石垣が築かれると落ち込みはなくなり、石垣を境にして一段低い平坦な地形に改築される。

一石垣— 調査区の北端部で東西に延びる高さ80cmの石垣を検出した。土壘やSD-03溝の埋めたては、改築に伴う土木事業と推察され、石垣の築造はそうした事業の完成を示すものと考えられる。土壘がうめられた直後にはすぐ石垣が築かれず、やや時間をあけてから石垣の築造に入ったことが上層観察から判断される。

調査区で検出した石垣は、その西半部が積み足しによって再度石垣が築かれていたことがわかり、当初の石垣は東に高く西に低い段状に築かれていたものと思われる（図版1）。

石垣の年代は、築造時に係わる土層から19世紀の土器片が出土し近世末期と思われる。また積み足しによる石垣の改築は明治以降である。

2) 近世中葉～後葉

調査区北半部で検出した土壘と溝SD-03が築かれていた時期にあたる。

一土壘— 溝SD-03の北側で基底部幅4m、上面検出幅1~1.5mの東西に延びる盛土成形の土壘である。土壘の北側は深さ2.5m以上にもなる深い落ち込みがあり、南側に溝SD-03が区画されている。おそらく藩邸屋敷に係わる施設がその南側にあり、北辺を区画した防御壁と思われる。

一溝SD-03— 土壘の南辺に沿って検出した幅2m、深さ1m程の東西に流れる溝で、東から西に向かって溝底が傾斜している。溝の両岸には護岸をかねた石組が残っている。その内、土壘に面して検出した石組は、割り石を作つて整然と組上げていたのにに対して、南側は葺石状に自然石を重ねている。石組の形態が溝の両側で異なる点は、護岸工事の時期が違うのかもしれない。

溝SD-03より18世紀後葉から19世紀にかけての土器片が出土している（図7）。

一溝SD-04— 調査区の西半部で検出した幅1.2、深さ10~30cmの浅い溝で、溝SD-03に直行している。溝SD-04の南端は、幅30cm、深さ20cmの小溝に変わっている。

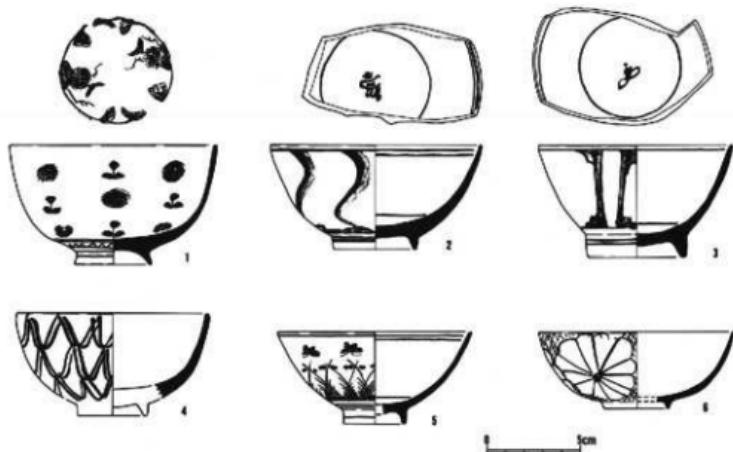


図7 SD-03出土土器 (S=1/3)

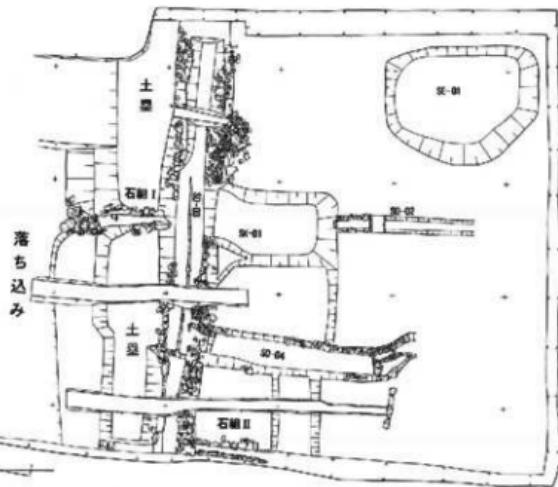


図8 近世中葉～後葉の造橋平面図 (S=1/200)

—石組I— 十墨を検出した中央部で幅30cm、長さ80cm、深さ50cmの石組による水口である。溝SD-03から十墨北側の落ち込みへ水を流し込む水口と思われる。落ち込みの斜面には石敷が施され、水口からの流水に対する護岸がなされている。溝SD-03を埋めもどした後は、溝SD-01の流れに切り替えられている(図版1)。

—石組II— 調査区の西端部で検出した幅20cm、長さ2.7m、深さ30cmの石組による水口である。溝底が南から北へ傾斜しており、溝SD-03へ流し込む水口と思われる。

—落ち込み— 土墨の北側で検出した谷筋状の地形的な落ち込みである。落ち込みは土墨の埋めもどしによって状況が変わるが、土墨が機能していた時期には、18世紀後葉の土器を含む暗茶色上の腐植土がかなり深く堆積している。よってこの時期は土墨を壇にして地形が南側で高く、北側が極端に低くなっている。柳本陣屋絵図とは景観が異なっている。

3) 近世前葉～中葉

土墨や溝SD-03が築かれる以前である。土墨のない状態で北側へ地形に沿って深く落ち込み、南側は高くなっている尾根状になっている。

—SE-01— 調査区の南東部で検出した幅5.5m×4.2m、深さ1.8mの不定形な土坑である。土坑内の状態は、土坑の斜面から底面にかけて粘土層や砂礫層を中心とする下層、木材片などが多量に廃棄された茶色粘土を中心とする中層、完形の土師器や土器片を多数包含した灰色土からなる上層からなる大別して3層に区分される。下層は涌水が激しく本来は井戸枠を組み上げた井戸遺構であったことが考えられ、調査で検出した状況は井戸枠を撤去した後から廃棄場に転用されたものと思われる。土坑内から17世紀後葉から18世紀前葉にかけての土器類が出土している(図10)。

—SK-01— 調査区の中央部で検出した幅4m×2.5m、深さ60cmの方形土坑である。溝SD-03に接していることから調査時は溝SD-03に直行して入り込み状に区画された溝と考えていた。しかし溝SD-03とは遺構内の堆積土が違うことや、溝SD-03に見られる石組が無いこと、出土した土器に古い時期のものが目立つことなどから、溝SD-03とは別の遺構と判断する。

土坑内よりSE-01と同時期の土器が出土している。

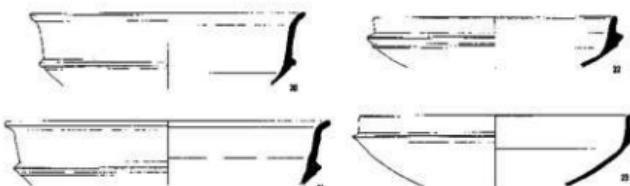


図9 SE-01出土土器 (S=1/6)

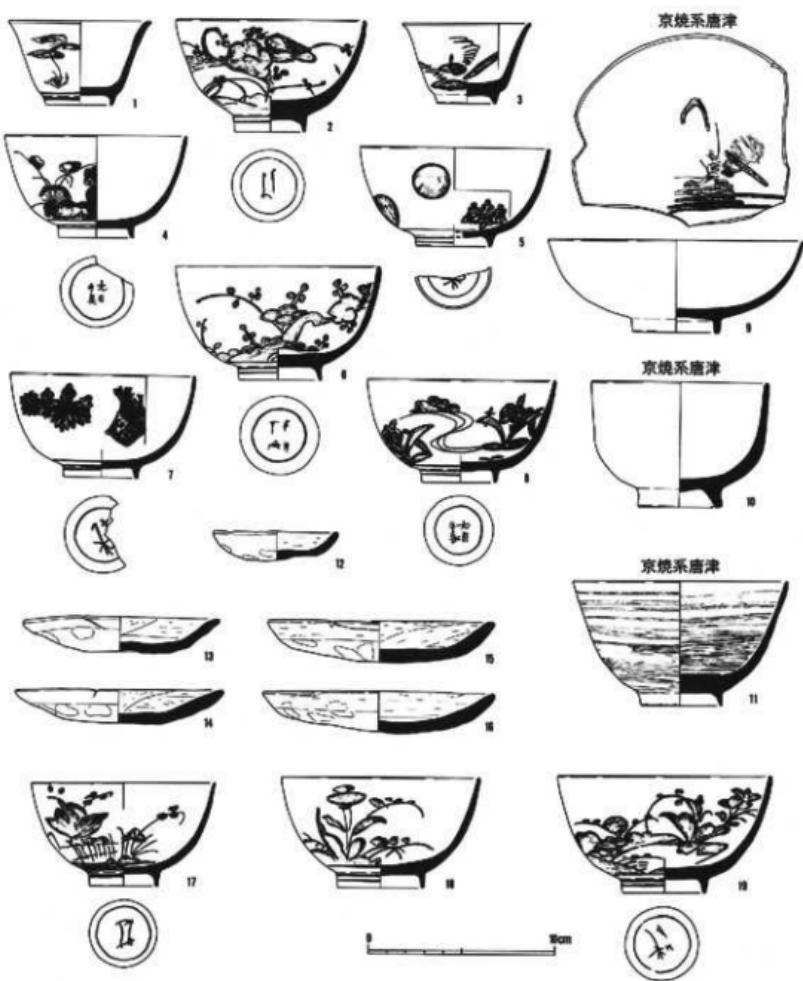


図10 SE-01出土土器 (S=1/3)

III ま と め

第4次調査では、17世紀から19世紀にかけての柳本藩邸に係わる遺構を検出した。遺構は、土塁をめぐらす以前（17世紀～18世紀前葉）、谷筋と藩邸が立地していた尾根筋との境に土塁を築き、その内側に溝を区画した時期（18世紀中葉～19世紀前葉）、さらに土塁や谷地形を埋めもどし、上塁に変わって石垣を築き平坦な地形に改築された時期（19世紀中葉以降）の大きく3時期に大別でき、藩邸屋敷が何度かの改築を繰り返していることが判明した。

特に19世紀中葉に築いた石垣は、現在に残る城郭の構築時期に關係する。したがって前述した第2・3次調査の状況と考え合わせると、嘉永7年（1854）の「柳本陣屋絵図」に關係する遺構と思われる。第4次調査では、石垣を築いていく過程で谷地形を埋めもどし平滑な地形に造成したうえで城郭を築いており、城の構築にはかなりおおがかりな十木事業がなされていたことが考えられる。いわゆる戦国時代に築かれた複雑な防御プランをもつ城郭に比べて、柳本藩邸の城郭プランは曲がりの少ない直線的なプランが目立ち、19世紀の幕末に築かれた近世城郭の特徴を示す遺跡といえる。また土塁をめぐらした19世紀中葉以前は、起伏の激しい地形が残ってる。よって、絵間に示された城郭の様子とはまったく違うため、4次調査では石垣で区画した城郭が築かれる以前に係わる古い柳本藩陣屋の景観を知る貴重な成果を得たことになる。

2 長寺遺跡（第3次）——櫟本町

I はじめに

天理市北部に所在する櫟本は東西700m、南北800mにもおよぶ市内では比較的規模の大きい市街地で、中心部を南北に延びる旧伊勢街道（上ヶ道）と灌漑用水として引き込んだ高瀬川とともに東西に延びる旧竜田道（横田道）がある。これら旧街道筋を中心にして町並みを形成している。近世の櫟本は、字「高品、市場、瓦釜、膳史（膳夫）、南小路、四ノ坪」の六つの垣内を総称して櫟本村と呼ばれていたようである。しかし宅地造成が進んでいる現在の町並からは、これらの垣内を区別するのが難しくなっているが、櫟本の自治区は今でもこの六区に分かれている。

大和では中世後期になると郷村制の発達によって村落の集村化が一層進み現在に見るような家屋の集中した集落の原形が生まれてくる。櫟本の場合も、いくつかの垣内集落を総称して櫟本村と呼



図11 長寺遺跡調査地点位置図 (S=1/10000)

ぶ郷を形成していたものと推測される。中世後期頃の標本については資料が少なく不明な事が多いが、『多聞院日記』には標本に城の記載があり城郭としての特徴をもつ環濠を区画した垣内を形成していたことが推測される。標本の市街地の西端部、添上高校の南側には字「奥ノ城」があり、またその東側隣接地にあたる字「四ノ坪、南小路」を中心にして字「北口、西口、南口」があり、城郭的色彩をもつ環濠集落の存在が十分に予測される。

ところで中世前期は大和郡山市の若槻荘を代表例とする名主屋敷が荘内に散在している散村的な

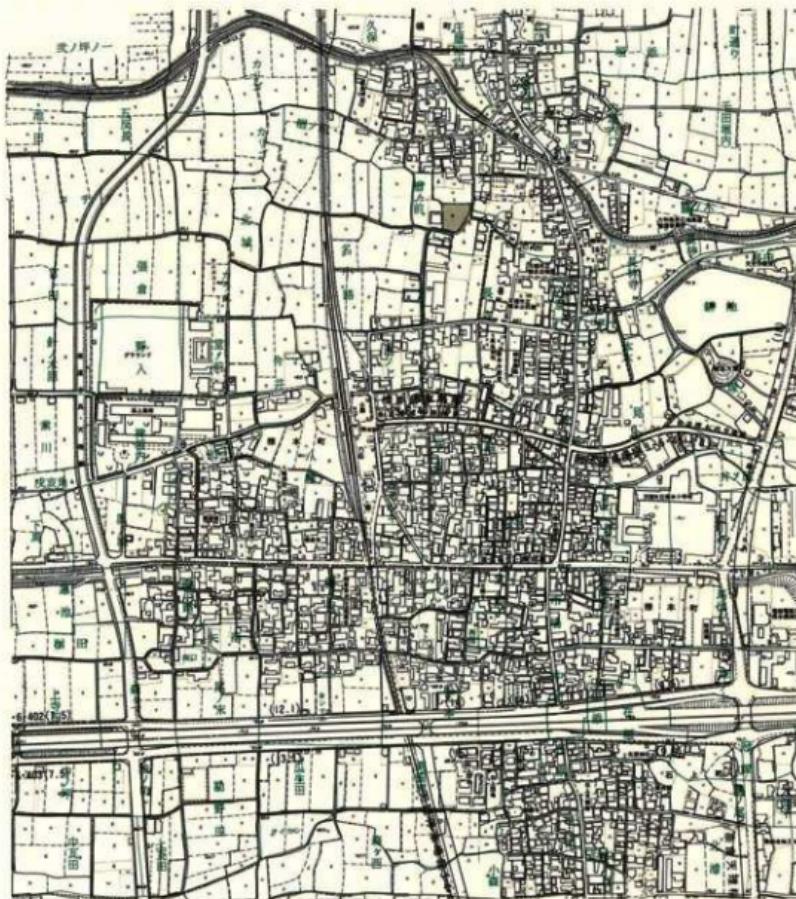


図12 標本地区小字地図 (S=1/7500)

村落や、奈良市の池田荘を例に荘内的一角におおざっぱながらも名主屋敷が寄り合っている疎塊村的な集落形態が指摘されている。櫟本の場合も五条五里六ノ坪、七ノ坪、六条五里一の坪、十二ノ坪の4町域において家屋が寄り合っており、池田荘と類似した疎塊村的な集落であることが指摘されている。中世前期の集落が所在していた地点は現在の字「四ノ坪、南小路、膳史」にあたり、中世前期から中世後期を通じてJR桜井線の西側一帯の地域に櫟本の中心部があったと推測される。

今回調査を行った長寺遺跡はJR桜井線の櫟本駅から北東200m程の地点にある高良神社を中心として櫟本の北部から橋町の南端にかけて広がる遺跡で、字「長寺、瓦釜、大門」なる寺域を思わせる小字が遺跡の範囲に残っている。特に昭和54年度において高良神社の北側隣接地で櫟本公民館の建設があり、事前の発掘調査をおこなった所、掘立柱建物跡を検出し、奈良時代前期の均整庶草文を施した軒平瓦など多数の瓦類も出土している。長寺に関する記載は延久2年（1070）興福寺雜役免帳において残っているのみで、寺自体の内容は良く分かっていないが、しかし長寺の存在が推定される高良神社のあたりでは古瓦が出土することが早くから知られており、古代寺院の存在が推測さ

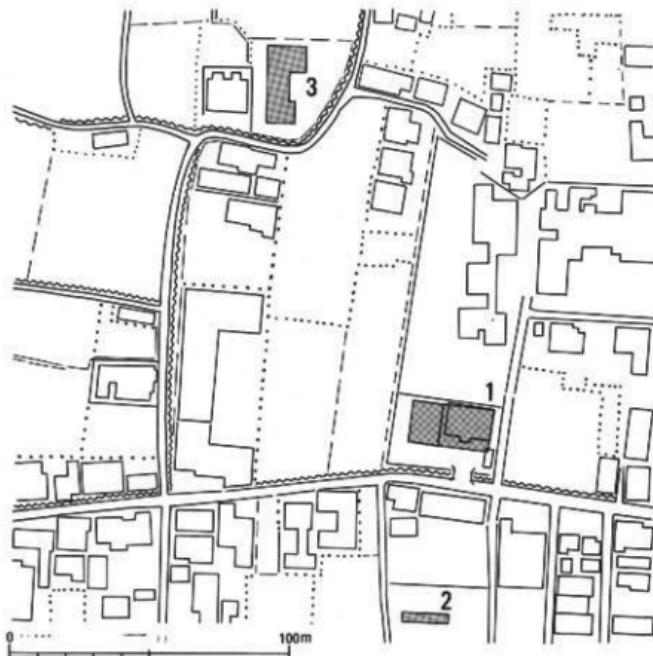


図13 長寺遺跡の調査地点 (S=1/1000) (1~3は調査地点と次数)

れていたところである。また弥生時代中期後半から後期にかけての遺構や多数の土器類も出土し、同地点が廃寺遺跡だけでなく弥生時代の複合遺跡であることが判明している。

昭和63年度におこなった調査は、長寺遺跡推定範囲の北端部に位置する、猪町において宅地計画が起きたため、昭和63年11月12日から平成元年1月14日まで事前調査を実施したものである。

II 調査の概要

(1) 調査区の設定

住宅建設の計画があったこの地点は、本来水田に利用されていたが、調査の直前には雑草が茂り雑種地にして利用されていた。住宅は数戸の家屋が立ち並ぶ計画であったため全面を調査対象に扱う必要があった。しかし調査地点の道路事情が悪く大形の重機が導入できないため、小形重機で長さ30m、幅8m、面積240m²の調査区を南北方向に設定し発掘をおこなうこととした。

また調査途中、井戸遺構や古墳に伴う周濠を検出したため、部分的に拡張し調査を図った。

(2) 基本土層（図15参照）

長寺遺跡は、東大寺山丘陵の先端から延びる標高80mから60mにかけての扇状地に立地した遺跡で、比較的傾斜をもつ階段条の田畠地帯になっている。調査地点は標高66.3mの水田地で、調査区の北半部、地表面より70~80cm下位で地山（黄褐色土層）が出土し基盤層が比較的高く残っている。しかし調査区の南半部では南東から北西方向に向かって流れる谷地形が広がり、地表より2.5m程度下位まで基盤層が落ち込んでいる。落ち込んだ谷筋には弥生時代中期から古墳時代前期、奈良時代にかけての土器を包含する堆積層があり、調査区の北半部と南半部とで地形的な違いとそれに伴う層序の変化を検出している。

表面より70~80cm下位で、いわゆる素掘り溝遺構が検出される。調査区の北半部で検出した地山面は素掘り溝によって上面が削られており、耕作によって削平を受けている。おそらく本米は地山の上面には黒色系の腐植土壤が存在し旧地表面が存在していたと考えられる。削平をうける以前は、調査区の北半部が現状の地形よりも高い地盤であったことが推測される。

耕作によって土壤が形成された表土層から暗灰色上I~III層（図15、1~6）、弥生時代から奈良時代にかけての土壤堆積が残る谷地形堆積層（図15、8~29）、弥生時代から奈良時代にかけてこの地域の地形的地盤をなしていた地山層（図15、30~32）に土層を大別することができる。

(3) 弥生時代

弥生時代の遺構は調査区の全面で検出した。その内、調査区の南半部には自然地形に伴う谷筋状の流路があり、流路内の堆積層から多量の土器が出土している。また流路の北岸から調査区の北半部にかけては、弥生時代の上坑や溝を検出した。

A) 土坑（SK-01~04） 調査区の中心部、流路の北岸付近で弥生時代中期（大和第IV様式）の土器類を包含した土坑を検出している。その内SK-02、04には土器が比較的多く含まれていた。

長寺遺跡

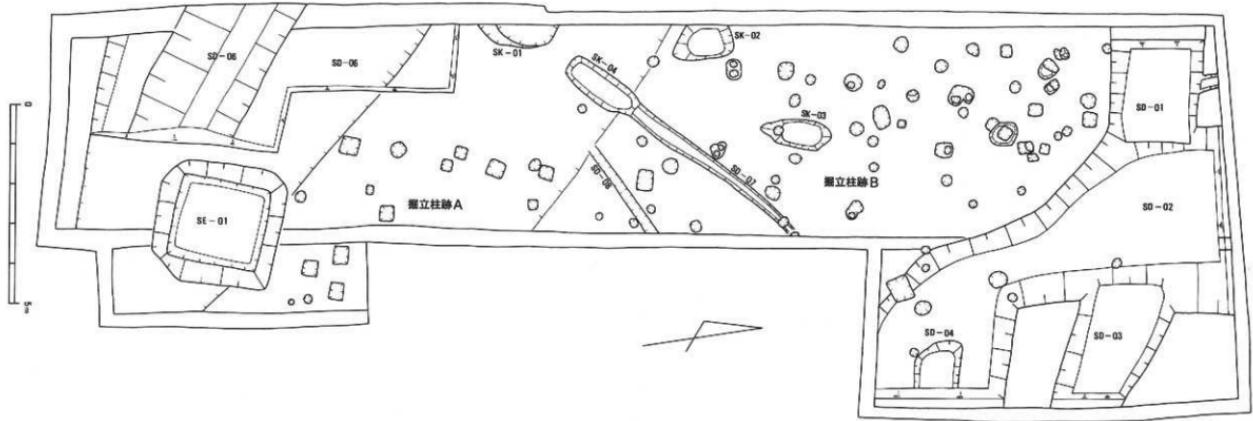


図14 遺構平面図 (S=1/100)

SK-01は、調査区の西壁部で検出した遺構で全体を検出してないが、径3m、深さ60~70cmの比較的規模の大きい土坑で、谷状地形北岸のゆるやかな傾斜地点に掘り込まれた遺構と思われる。遺構の性格は不明。時期は上坑内より大和第IV様式の土器片が出土している。

SK-02は、調査区の北壁部に接して検出した径1.5m、深さ0.8mの不定型な土坑で、土坑内の中位から多量の人骨と第IV様式の土器片が出土している。

SK-03は、長さ1.8m、幅0.8m、深さ30cmの浅い土坑で大和第IV様式の土器片が少量出土している。

SK-04は、SD-07を検出した南側先端にある長さ1.8m、長方形の土坑で、土坑の上位からSD-07に伴う土器類が多量に出土（図16）、土坑の床面直上から完形の高杯1点（図16-1）が出土している。

B) 小溝（SD-07・08）、調査区の中央部で検出した遺構で、いずれも谷筋に対して直行する状況で検出した。遺構は地山面が高くなっている調査区の中央から北半部にかけて検出が容易で、SK-01・04を検出した谷地形に伴う傾斜地点では茶色系の土層が際立ち掘り込みの浅い小溝遺構の検出は難しかった。おそらく小溝は谷筋に流し込んでいたものと思われる。出土遺物はSD-07から多量の大和第IV様式の土器類が出土している。SD-08からは土器が出土していないが、SD-07と同時期と思われる。

調査区の北半部で検出した地山層は、後世の削平によって地形本来の高さを損なっている。そのため谷筋に接した所（調査地中央部）では、本来の生活面がかろうじて残っていたものと思われる。しかし、調査区の北端部には弥生時代の遺構はなかった。このことは、本来の地盤が検山面よりもかなり高く盛り上がった起伏のある地形であったため調査区の北端部からその北側にかけては大きく削平をうけて弥生時代の遺構が残らなかったと推測される。SD-07・08は規模の小さい溝で検出しているが、原形はもう少し幅と深さをもつ溝であったとも考えられる。

C) 谷地形（SD-06・06下層）、調査区の南半部で検出した幅14mの谷筋状の落ち込みである。弥生時代には大別して谷地形の南辺に沿って黒灰色粘土層（図15-17）を形成した時期と、谷地形の北辺に沿って堆積しSD-06下層の時期である。SD-06下層ではSK-01のベース層（図15-18、19・20）になり、土層中にはわずかに弥生時代中期の土器片が包含されていたが、黒灰色粘土層には多量の大和第IV様式の土器片が出土している。

D) SK-04出土土器（図16参照）、谷地形に伴うSD-06や土坑、小溝から多量の土器類が出土している。いずれも破片が主で実測しにくい土器片が目立ったが、その内比較的土器の残りが良く、土器の復元がしやすかったSK-04の上層と下層から出土した土器の一部を図化した（NO1下層、NO2~10上層）。

壺（図16-2）、口径16.3cmのいわゆる壺D型で、頸部タテハケ後、口縁部をヨコナテ仕上げしている。体部は頸部のタテハケ後、頸部と体部の接点から下方に向かって体部の上半部にタテハケを

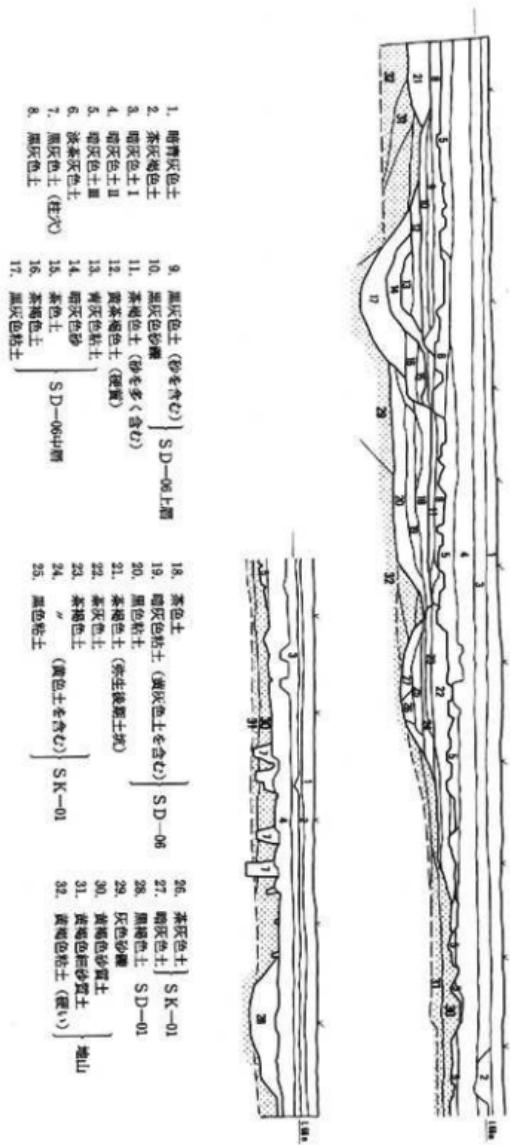


図15 調査区西壁断面図 ($S=1/100$) 网点部は地山(基盤層)

施し、ハケは右から左へ順に調整している。体部の下半はタテハケ後、ヘラケズリで仕上げている。SK-01の上層からは他に頸部に数条の凹線文を施文した広口壺や波条文を施した広口壺の破片も出土している。

蓋(図16-3) 口径16.2cm、器高6.2cm、色調赤褐色のやや小形の蓋で、外面にはタテハケ、内面にはヨコハケの痕跡が残っている。天井部は外面を指圧調整し平底状に作っている。

壺(図16-4~6)、口径12.8~15.4cm、くの字状に屈曲した口頸部に幅広いヨコナデを施したいわゆる瀬戸内系の中形壺で、口縁端部には一条の凹線文を施文し端部を上方にはねあげた壺が目立つ。体部外面は口頸部にヨコナデを施す前にタテハケまたはハケ後ナデを加え、下部にはタテ方向にヘラケズリをするものがある。体部内面は、口頸部にヨコナデを施す前にハケを施し、上半部をタテハケ(図16-6)、左上りの荒いナメハケ(図16-5)、左上がりのナデ仕上げなどがある。いずれも体部の張りが強い。

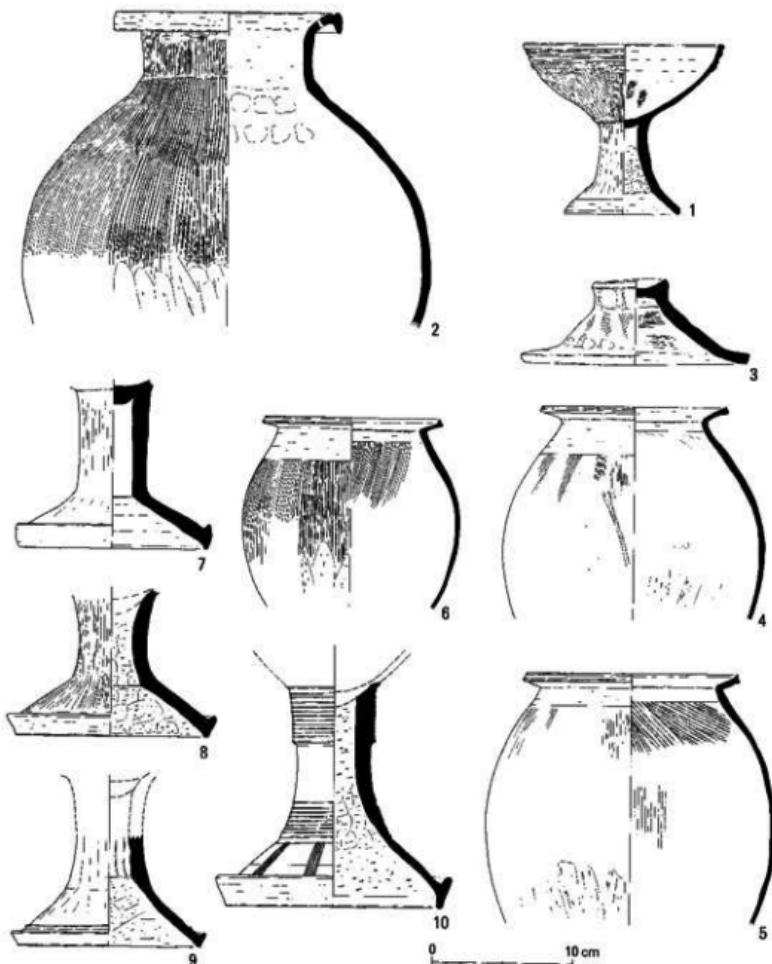


図16 SK-04出土土器 (S=1/4) 1下層, 2~10上層

タタキ痕を残す壺は見られない。大和では第Ⅲ様式になると第Ⅱ様式に盛行した大和型壺と瀬戸内系の壺が共伴して出土するようになる。SK-04のように第Ⅳ様式になると既に大和型壺はなくなり、また大和型壺と瀬戸内系の壺との折衷型壺も見られなくなっている。実質的には瀬戸内系の壺が全盛期を迎えた段階といえる。

高杯（図16-1, 7~10）、SK-04下層から高杯の完形が1点出土しているが、大部分は脚部が出土した。出土した高杯は大別して底部径15.3cm、脚部高15.3cmの大形高杯（図16-10）、底部径12.8~13.6cm、脚部高9.8~11.2cmの中形高杯（図16-7~9）、口径14.3cm、器高12.2cm、底部径8.4cm、脚部高6.6cmの小形高杯（図16-1）が大きさの違いから区別できる。下層から出土した高杯（図16-1）は、杯部に4条の凹線文を施し、その後杯部底面をタテケズリしヘラミガキを施している。杯部内面は、ハケの後ナデを施し、口縁部はヨコナデで仕上げている。

高杯の脚部は、杯部との付け根から緩やかなカーブを付けながら脚部の裾が開くもの（図16-10）と柱状の脚部で稜を付けて裾が外曲するタイプ（図16-7~9）の2種に分類できる。前者にあたる図16-10は、大形高杯の脚部で多条の凹線文を柱状部の上下に施し、上部の凹線文には段を付けて幅広いヨコナデで仕上げている。また脚部裾に5条を単位とする鋭い工具で施した沈線を6ヶ所に施している。凹線文を基調にして独特な形状に仕上げたこの脚部は畿内のスタイルの土器というよりは、むしろ播磨から以西の瀬戸内地域の特徴が強いように感じられる。杯部はおそらく水平縁口縁の高杯と思われる。後者の図16-7~9は、柱状で稜の付く据開きの土器で畿内地域に特徴的な脚部である。端部はいずれも上下に肥厚させ幅広くヨコナデを施しているが、下層出土の小形高杯は端部に幅広いヨコナデを加えているが、端面を肥厚させていない。また前者と違い脚部には継ヘラミガキが施されている。

脚部の内面はケズリ仕上げのものが目立つ。中にはナデで仕上げているもの（図16-7）、裾部のみケズリ仕上げするもの（図16-9）、裾部をヨコナデで仕上げるもの（図16-1）などがある。また形態では、脚部裾を外曲させてラッパ状にひろげるものの（図16-7, 8）と、湾曲状に脚部裾が広がってゆくもの（図16-1, 9, 10）がある。

E) 小結、調査区では弥生時代中期の大和第Ⅳ様式を中心とする遺構と谷地形に伴う堆積層を検出した。遺構は谷地形の北辺で検出されたが、遺構の検出状況から推測して調査地点一帯は、現在よりも起伏のある地形であったことが推測される。しかし後世の削平によって平坦な地形に造成され、その時に、立地条件の良好な地点であった集落跡が削られてしまっている可能性が強い。谷地形から出土した土器の状況や土坑から出土した土器の量から推測して、付近には第Ⅳ様式の集落跡が存在していたものと思われる。

（4）古墳時代

A) 古墳時代前期の遺構、調査区の北端部で検出したSD-01・03溝と谷地形に伴うSD-06に古墳時代前期の包含層がある。

SD-01・03はSD-02によって切られているが、本来は幅1.5m、検出した深さ0.5mの東西に流れる一連の溝である。溝内より布留期の土器片が出土している。遺構の性格はよくわからない。

B) 古墳時代後期の遺構、調査区の北端部で検出したSD-02・04が後期の遺構である。SD-02はSD-01・03を切断して区画されており、最大検出幅4.8m、深さ0.5mの溝状遺構で、溝の南端が東西方向に屈曲しSD-04に連なっている。SD-02・04からは古墳時代後期の円筒埴輪片数点(図17-10~12)と盾型埴輪片(図17-13)、須恵器類が出土している(図17参照)。SD-02からSD-04へは溝が直角に曲がり、方形に区画した遺構で埴輪が出土していることから推測してSD-02の東岸からSD-04の北岸にかけては古墳の墳丘基底部とも考えられ、溝はそれに伴う周

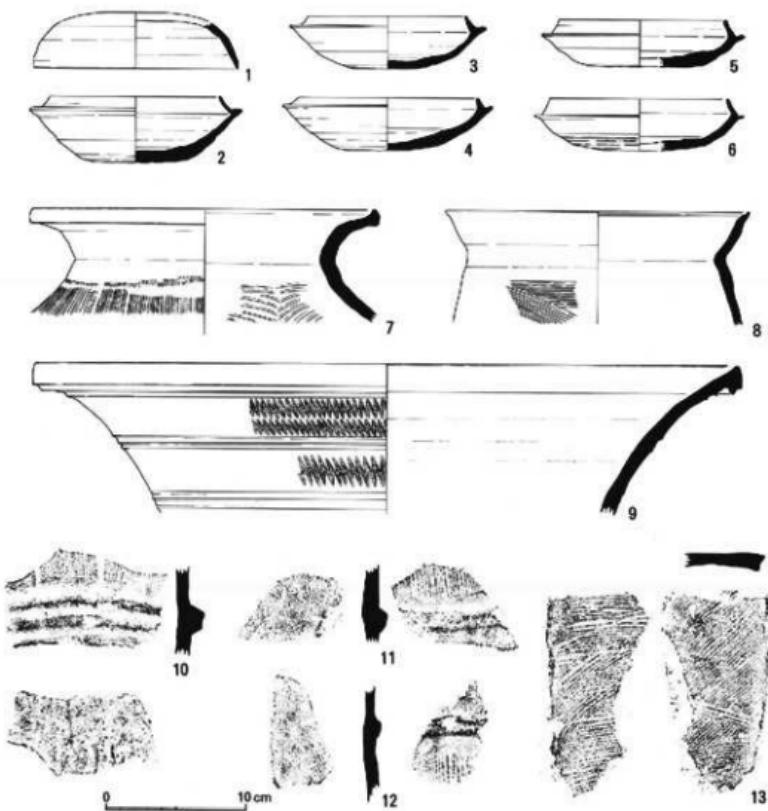


図17 SD-02・04出土土器(S=1/4) 1~7, 9 須恵器, 8 土師器, 10~13 増輪片

兼と思われる。

(5) 平安時代

調査区の全面にわたって平安時代後期に推定される建物跡と井戸1基を検出した。

A) 建物跡 調査区の南半部、井戸SE-01の北側で方形の柱穴がめぐる掘立柱跡Aと調査区の北半部、SD-01・02からSK-04との間で円形の柱穴が集中する掘立柱跡Bがある。掘立柱跡Aは、地山面で検出したため遺構の検出面が浅くなってしまい、良好な状態で柱穴を確認できなかった。しかし柱穴の検出状況から南北に5間、長さ7~8mの規模をもつ家屋が推定される。掘立柱跡Bでは、SD-01・02の調査の際に柱穴が十分に確認できず現状では家屋の規模が定かでないが、柱穴の検出状況から南北に5~6間、長さ10~12mの比較的規模の大きい家屋がある。掘立柱跡Bは2棟の建物が重複している。

家屋の時期は柱穴内から10~11世紀頃と思われる黒色土器の破片が出土しており、平安時代後期には廃絶した家屋と思われる。

B) 井戸遺構、調査区の南端部で検出した規模の大きい井戸で、掘り方の大きさが検出面で3.2×3.1m、井戸内中位で掘り方が1.9×1.9m、井戸内に板材を横組して一辺が0.9mの方形に井戸枠を組み上げている。井戸枠の残りは悪く、調査中に破損が生じたためおよそ3m掘り下げて調査を中止したが深さ4~5mに達するものと推測する。井戸枠に用いている板材は、長さ1.4m前後、幅15~30cm、厚み3~5cmのもので、上部を石積みで仕上げている。井戸の内部は、検出面から深さ2mぐらいまでの上半部にかけて井戸枠に使っていた石材や枠板が多数落ち込み、井戸の荒廃期を示す堆積層位と思われる。下半部は粘土層のみとなる。土器は上半部と下半部との境に位置して完形の小形黒色土器碗(図19-2)、黒色土器碗の破片1点(図19-3)が出土し、それより20~30cm上位で落ち込み石に混じって完形の黒色土器碗1点(図19-1)が出土している。いずれも井戸の荒廃期にあたる。また検出面より深さ2.7m程掘り下げた下半部の粘土層中から2点の完形土師皿(図19-4, 5)が出土している。

C) SE-01井戸出土土器(図18参照)、井戸内より平安時代後期の土器類が出土している。その内、実測可能な黒色土器B類碗と土師皿を図化した。

黒色土器碗 口径15.4cm、器高6.2cm、見込み高5.0cmの大ぶりの黒色土器碗(図19-1)と、口径10.3cm、器高3.9cm、見込み高2.8cmの 小形黒色土器碗(図19-2)の2種がある。形態は、平底状の底部に発達した高台が張り付けられ、内湾状に立ち上がる体部に外反した口縁部をもつ。内外面とも密にヘラミガキを施す。高台部と口縁部のヨコナデはヘラミガキの前に施す。底部内面は平行線状のミガキを密に施す。高台は図19-2, 3のものは端部を外反状に成形しているが、やや上層位から出土した図19-1の黒色土器碗の高台は、瓦器碗に近似した外側に直線的な仕上げ方をしている。いずれも黒色土器碗の中では末期のものと思われる。

土師皿(図19-4, 5)、口径11cm、器高2.2~2.5cmのいわゆる“て”字状口縁の皿である。器壁

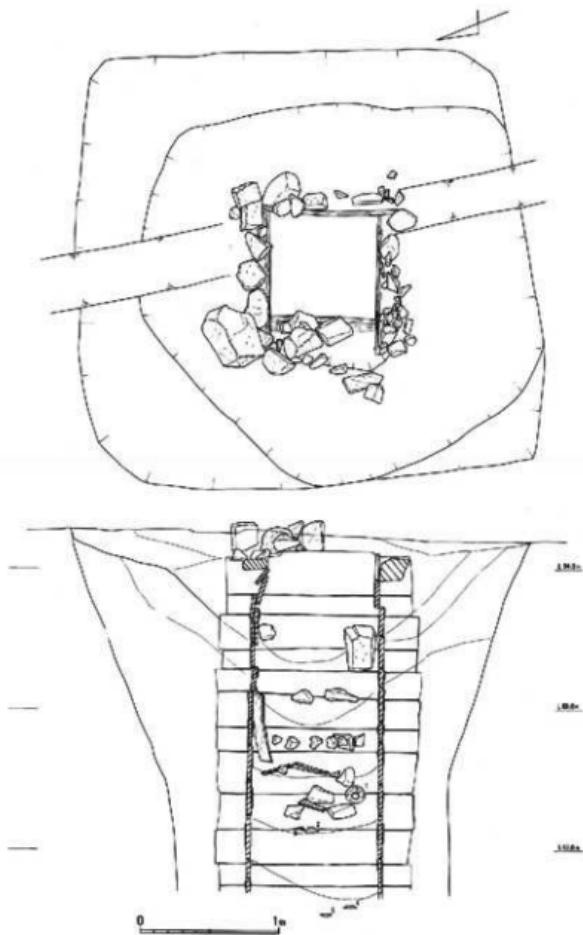


図18 井戸S E-01平面・立面図(1~5の土器ナンバーは、図19と対応する)

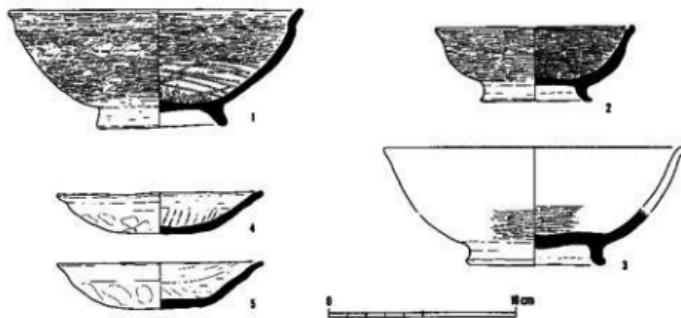


図19 井戸SE-01出土器 (S=1/3)

は比較的薄く、11世紀代の瓦器碗と併行する“て”字状口縁の皿と比べて器高があり深めの作りである。外面は指圧調整後、口縁部をヨコナデ、内面はタテナデ後、口縁部をヨコナデ仕上げしている。他に少量であるが井戸の上層部から土釜片や須恵器壺の破片が出土している。

D) 小結、調査区では、平安時代後期の家屋数棟と井戸1基を検出した。家屋は柱穴の状況から比較的規模の大きい建物の存在が見込まれる。調査地点では瓦器碗などの中世土器が出土上器に見あたらず、検出した家屋はいずれも中世以前のものと思われる。家屋の年代を直接知る資料はないが、家屋に伴って検出した井戸の廃止時期が井戸内から出土した黒色土器碗の特徴から10世紀末から11世紀代に位置づけられ、井戸が機能していた時期を推定すると9～10世紀代に使われていたと考えられる。

ところで検出した家屋と井戸遺構の性格であるが延久二年(1070)の興福寺難役免帳に長寺の記載があり、11世紀後半までは長寺の存在が考えられる。3次調査で検出した平安時代後期の家屋跡が時期的にも見合うことから長寺に関係する施設と判断することもできるが、長寺の中心部と推測される第1・2次調査地点の状況と比べて第3次調査地点は瓦片の出土量がわずかで、場所もやや離れていることから必ずしも調査で検出した遺構が長寺に関係することは言えない。たとえば10～11世紀にかけて治田を経営基盤としながら寺領莊園も請負耕作をなす、いわゆる田堵に属するような上層農民の居住跡とも推測することができる。

III まとめ

長寺遺跡第3次調査・橋ノ前地区の調査では、弥生時代から古墳時代、平安時代にかけての顕著な遺構を検出した。

弥生時代 弥生時代では中期（大和第IV様式）の遺構が目立ち、確認した遺構は土坑や小溝であるが出土した土器の量は多く、谷筋に堆積していた包含層からもおびただしい第IV様式の土器片が出土している。第1次調査の長寺地区でも奈良時代の遺構と共に弥生時代中期（第III～IV様式）の土器が多量に出土しており、調査地点一帯には弥生時代中期後半を主体とする集落遺跡の存在が考えられる。

古墳時代 古墳時代は前期の溝と後期の古墳跡1基を検出した。長寺遺跡は東大寺山古墳群がある東大寺山丘陵の裾に広がる遺跡で、古墳群との関係が興味深いところである。前期の溝遺構がどのような性格を示すものなのか今のところ定かではないが、大型前方後円墳が東大寺山古墳群に出現する時期に並行するだけに、今後この地域における調査で同時期の遺構がさらに確認されることを期待する。また後期の古墳跡は古墳群の形成を示唆するものとするならば、同遺跡が古墳地帯として東大寺山古墳群と並行して群集墳の展開をみることになり、天理市北部の古墳群の形成が単に丘陵地帯においてのみ出現したのではなく、丘陵地帯から低地に含まれる扇状地帯までかなり広範囲にわたって起きていたことが考えられる。

奈良時代 長寺廃寺は寺跡の付近から出土している瓦の特徴から奈良時代に建造された寺院であることが判明している。寺跡の中心部は高良神社のあたりと推測されているが、柄ノ前地区はおよそ100m程北方にあり長寺の中心から外れていることが考えられる。調査ではわずかに瓦が出土しており寺域に接したことろと思われる。奈良時代の遺構は確認していない。

平安時代 10～11世紀頃の家屋と井戸1基を検出した。一辺が5～6間の比較的規模の大きい建物跡が複数と、造りのしっかりした井戸の様子から推測して平安時代後期の屋敷跡と思われる。調査地点一帯は東大寺領莊園で知られている櫟莊（櫟本莊）に含まれるところで、水田を莊園領主から請け負い耕作する田堵（上層農民）の住居跡とも考えられる。櫟莊では字「四ノ坪、南小路、膳史」に中世前期の名主屋敷が出現するが、調査では中世の遺構を検出してないため中世集落の形成が起きる段階で屋敷が廃絶していたものと考えられる。田原本町の十六面・薬王寺遺跡では、11

世紀頃から家屋の集中が始まり中世集落が出現するが、9～10・11世紀にかけての遺構が中世に比べて極端に少なく村落の景観には対照的な様相を見ている。今回検出した遺構が櫟莊における中世以前の農民の家屋とするならば、櫟莊における古代莊園の農村と名主屋敷による集村化が目立つ中世村落との景観の違いを検討する興味深い一資料といえる。



図20 包含層出土の瓦 (S=1/3)

3 別所遺跡 ——別所町

1 調査の契機と経過

当遺跡の調査は、天理市石上町字堂垣内777番地において天理市立北中学校屋内運動場の新築に伴い、その事前調査として昭和63年5月9日より同年7月6日まで発掘調査を実施した。

調査対象地は、中学校敷地内の東端地域で、体育馆建物と実習棟建物の空間地に小トレンチを2カ所と、体育馆建物の南側に東西10m、南北7mの調査区を設定した。

調査当初は、この体育馆建設時に造構の削平を受けていたことを予想していたが、グラウンド整地土直下に破壊されることなく検出されたのである。しかし、年度内における既設建物の解体と新築工事の日程を考慮すると、当初予定していた以上の調査面積の拡大は望めず、体育馆本体下の調査は断念した。

2 遺跡の環境と立地

別所遺跡は、奈良県遺跡地図における8D-138に当該する周知の遺跡である。遺跡の範囲は、北中学校を中心として東西約300m、南北約250mにおいて土器の散布が認められる。

遺跡の立地は、中学校グラウンド面が標高81.8mを測る。東側は豊田山丘陵がひびき、3本の尾根筋が狭小な谷を形成



図21 別所遺跡調査地

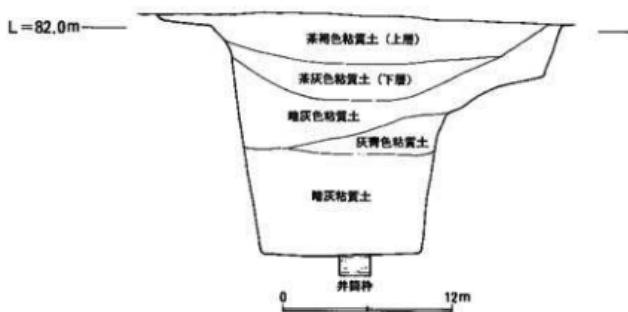
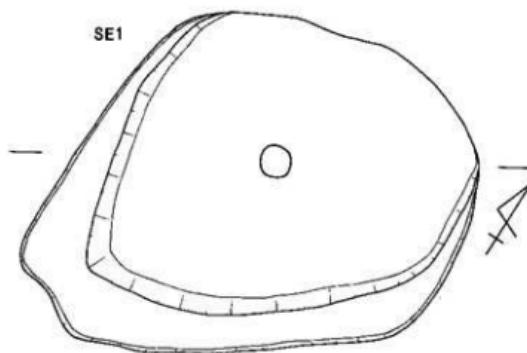
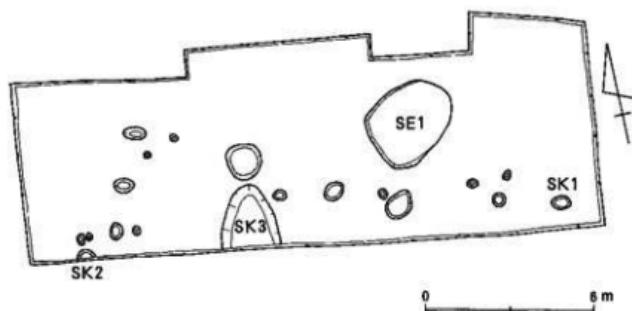


図22 検出遺構と井戸跡1実測図

して平野部に突き出している。尾根筋の最高所は標高が100m以上あり、尾根西端部では急峻な崖面を形成している。このため遺跡が立地する平野部も西に向って高低差のある、不定形の水田が造成されている。

周囲の遺跡環境で注目されるのは、南へ約250mにある別所城跡の存在することである。当城は当地の土豪である萩別所氏により、室町時代に築城されたと推定される中世城である。

築城にあたっては、豊田山丘陵の西端部を利用し、城郭の周辺に堀をめぐらしていた。

堀部分については、昭和60年に部分的に発掘調査が実施された。

この結果によると、堀上面は幅約14m、深さ5mを測る。そして堀の外側には2~3mの土塁が築かれていたことも確認されたのである。

古墳時代にあたっては、やはり豊田山丘陵の西側尖端部を利用して築かれた後期の前方後円墳が群集する特異な地域である。

この中で最大の古墳は別所大塚古墳である。主軸を丘陵の尾根筋に合わせているため、後円部を南面に向いている。全長約115mあり、前方部は丘尾を切断して古墳を区画している。後円部は直径約75m、高さ15mあり横穴石室を内部主体にもつと推定されているが、現状は石材を全て持ち出され、大きな盗掘穴となっている。

別所大塚古墳より200m南へ下った地点には南北に主軸をもつ別所籠子塚古墳がある。墳丘規模は全長約47m、後円部直径約22m、高さ約4.5mあり、前方部から削抜式石棺が出土した。

また、現状では削平を受け、一部調査によりヨコハケを施す埴輪を出土した山の辺小学校内の前方後円墳（塚山古墳）や、籠子塚古墳の南側で検出された袋塚古墳（全長約50m）が所在する。

なお袋塚古墳の周濠堆積内において平安時代前期に比定される半裁された鏡が出土した。直径約9cmあり、内外区の文様により瑞花八稜鏡と推定される。

さらに古墳の基底面にあたる部分において井戸跡が2ヶ所検出され、SE1より12世紀中頃に比定される瓦器碗、土師器、土釜などを出土し、古墳の濠が埋められた後も活発な生活場所として利用されていたことが知られる。

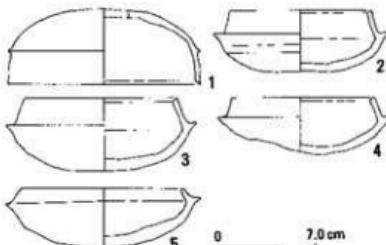


図23 土坑出土土器

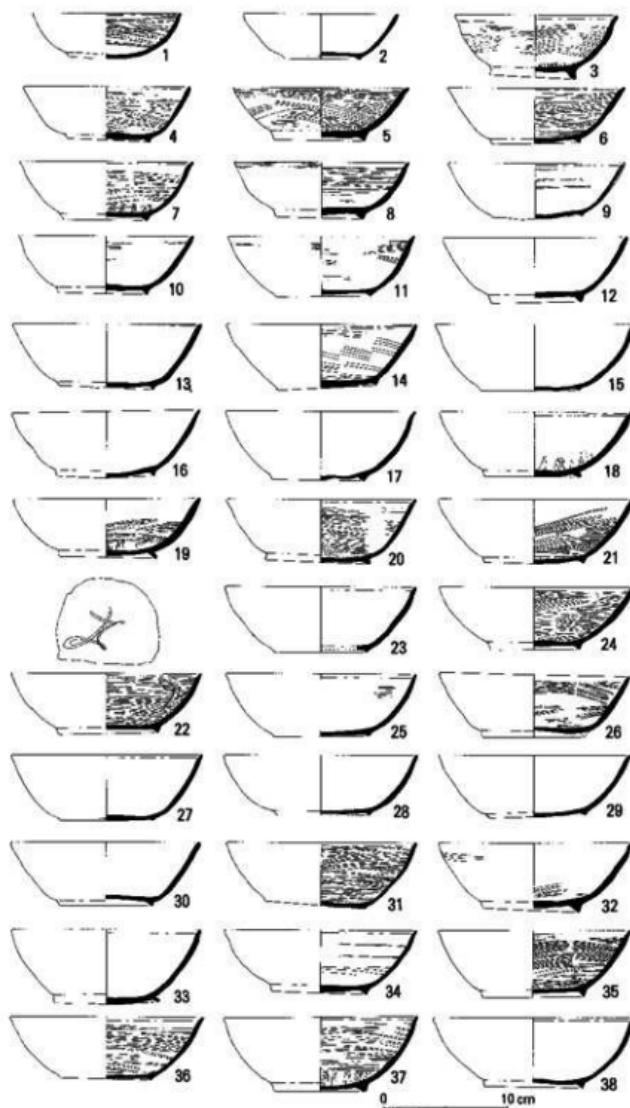


図24 井戸跡1出土土器

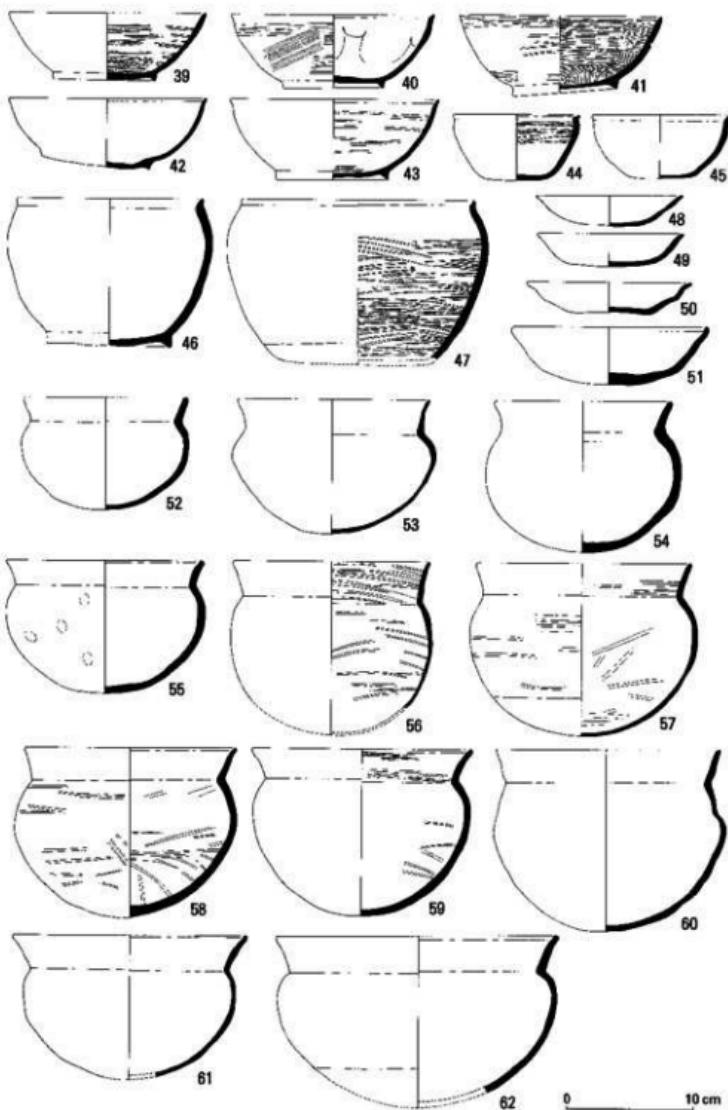


図25 井戸跡1出土土器(2)

3 調査の概要

調査は体育館建物と実習棟の空間地にある中庭に、東西7m、南北3mの第1トレンチ及びその西側に東西4m、南北3mの第2トレンチを設定した。また、体育館建物の南側にも東西10m、南北7mの第3トレンチを設定した。

第1トレンチでは、焼却場のごみ穴があけられ遺構の確認はできなかった。第2トレンチにおいては、表土下約20cmにおいて黄褐色土の地山面が露出した。第3トレンチにおいてもグラウンド整地土を取り除いた時点で東西方向に延びる素掘溝と掘立柱建物に推定される掘形をもつ土坑、井戸跡が検出された。以上をまとめて上層遺構とする。

そして、トレンチの周囲に排水用溝を掘り込んだ時

点で、土坑の落ち込みが認められた。これを下層遺構として報告する。

上層遺構

素掘溝 東西方向に3条検出された。SD1は幅約1mあり、深さは9cmである。SD2・3は幅約45cm、深さ約12cmでやや規模が小さい。時期は不明であるが近代のものと推定される。

土坑 東北部において11カ所検出された。方形で柱痕跡が認められるものが4カ所ある。一辺約50cmの正方形、あるいは、40×50cmの長方形の掘形である。柱間は約1.5m～1.7mあり掘立柱建物

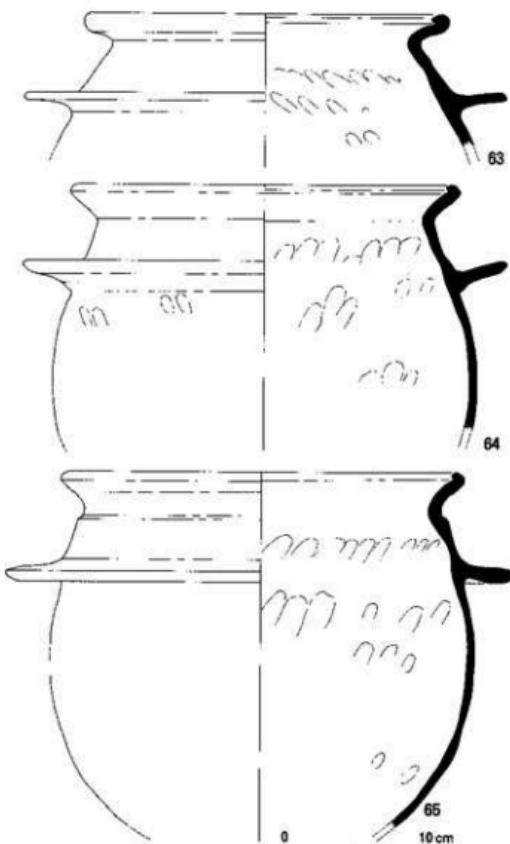


図26 井戸跡1出土土器(3)

と推定されたが、柱通が整っておらず、また聚間方向の掘形が未検出であるため建物規模は不明である。時期についても積極的に推定できる遺物は出土しなかった。ただ後述する井戸跡の掘形部分を掘り込んだ掘形もあることから中世以降であろう。

井戸跡1 調査区中央よりやや東寄において検出された。

検出当初は西南部が直角にコーナ部をつくっていたこともあり住居跡と推定されたが、拡大のものから小さな石まで散乱し、さらに土師器片も含まれていたことなどから、ごみ穴などの可能性も考えられた。

そして掘り上げた結果、東西約2.7m、南北約2.4mの不整形な梢円形を呈し、深さ約1.88mの井戸跡が検出された。西側は上面より約10cmで一部平坦面をつくるが、東側は垂直に近い壁である。現状では素掘井戸であるものの当初は石積であったものと推定される。そして中央部には、直径約20cm、深さ13cmの曲物を利用した一段の井筒を検出した。

出土遺物の多くは、井戸跡断面図で示した上層の2層間に限られ、粘性の強い暗灰色粘質土より下層では出土しない。このことから、井戸がほぼ埋没した段階で窪地となっていた所に黒色土器、土師器などが一括して投棄された状況が推定される。

下層遺構（図22）

下層遺構はグラウンド面から約35cmで検出された。検出地点が南半にかたよるのは、北から南へ地山面がゆるやかに傾斜し、北半部がグラウンド直下で地山面を露出されたことと関係があろう。学校建築に際して既に削平を受けたと考えられる。

上坑は19カ所が検出され、7カ所から土器片を出土した。SK1は東西41cm、南北70cm、深さ21cmの梢円形を呈し、須恵器杯身、蓋が5個体まとめて出土した。SK2はトレンチ南端にあたり、規模は不明である。土師器壺形土器が出土した。

この他、明確な遺構は検出できなかったが、盾形埴輪片が10片以上で散乱する部分があり、埴輪の外表面は粗いタテハケが施されている。

出土遺物

井戸跡1（図22、24～26）

井戸跡1では、土師器、黒色土器、羽釜がコンテナ整理箱20個以上の出土である。

そして図化した資料は、土師器皿（図25、48～51）、土師器羽釜（図26、63～65）、黒色土器碗A類（図24の3を除くおよび図25の39～43）、B類（図24の3）である。他の黒色土器は出土点数が少なく、黒色土器壺（図25の44～47）、黒色土器甕（図25の52～62）の器種である。

黒色土器碗A類は42点を掲載したが、このうち12、13、15、17、18、19、29、38は内面の炭素吸着がほとんど見られず、土師器に分類されるだろうが、しかし、形態上は他のものと差異がなく、焼成時における不吸着の違いと考えられる。法量は1にある様に口径11.8cm、器高3.7cm、あるいは2では口径12.2cm、器高3.6cmの大きさから、43の口径16.1cm、器高6.5cmの人気さまで差が認めら

れる。

しかし、全体的には口径15cm以内、器高5cm以内の群と、それ以上の2群に大別され、その群内でのバラツキは少ない。

輪部の形態は、直線上に外上方へ延びるものと内側へ湾曲する形態がみられる。口縁部端部は、丸く收めるものと、内側で1段の凹線をつくる形態が見られる。いずれも数量的な片寄は見られない。

底部の高台は2, 19, 37のように台形でしっかり付けるものは少なく、多くは三角形で低い高台である。高台そのものが薄いため全体にはがれ易い様である。底径は5.8cmから8.8cmまであるが、7~8cmが $\frac{2}{3}$ 程度を占める。外面の調整は軽くヘラ磨きを施し、内面は全面をヘラ磨きを施す。22は内面と底部に渦巻状の暗文を施している。40も内面にコ字状の暗文を施している。

黒色土器壺（図25, 44~47）この器種は小形の44, 45と大形の46, 47に分類される。後者ではさらに高台が付く。44は口径10cm、器高5.3cmあり、口縁端部は外上方へひねられる。45は口径10.9cm、器高5.1cmある。46は口径14.8cm、器高11.6cmあり、体部は内側に丸く湾曲するものの口縁端部は外上方へつまむ。高台は台形を呈す。47も46と同様の形態を呈し、口径は18.5cm、器高13cmである。底部は欠損のため高台の有無は不明である。46の類似資料は、平城京左京六条三坊十三坪の土坑SK21出土の62に形態、法量とも共通する。

黒色土器壺（図25, 52~62）11個体を図示したが、法量の大きさは、大小のバラツキがあるものの形態的には、短く外反する口縁部と、やや偏平な体部は共通する。53, 57, 58, 59, 62は体部下半部が型押成形による痕跡が認められる。体部外面はススの付着が著しく煮沸貝として使用されたことは明らかであろう。この手の壺の類例は乏しいが、平城京東堀河SD017上層出土の黒色土器壺Aより後出の形態を示しているものと思われる。

上師器皿（図25, 48~51）50は体部中央付近で屈曲する。口径13.3cm、器高2.4cmである。51はやや歪な形態を呈し、口縁端部は内側へひねり気味である。口径15.3cm、器高4.6cmである。

羽釜（図26, 63~65）63は口径25.8cmあり口縁端部は内側へ強くなるめている。頸部の屈曲も強い。64は口径27.4cmあり口縁端部は内側へ折り曲げるが、63よりは強くない。体部も張りは少なく胴長である。鍔は大ぶりで上方を向く。65は口径27.5cmと大形である。口縁端部は64と同一のつくりである。頸部に段がつき、鍔は下方に向かい。残高は25cmあるが、底部が若干欠けているため、全長は約28cmである。

下層遺構土坑1出土遺物

須恵器杯（図23, 1~5）

蓋（1）は口径13.7cm、器高5.4cmあり口縁端部内面で段をつくる。体部から立ち上がりにかけての稜も明瞭につくる。2~5は杯身である。口径は10.3~11.6cmと差はない。器高も4.1~5.2cmである。立ち上がりは5がやや短かいが、他は長く、口縁端部は内面で段をつくる。3の受け部端

部は $\frac{2}{3}$ 程度細かく打ち欠いた状況が観察される。2は体部上面に「一」状のカマ記号が刻まれている。

5の形態は新しいタイプと考えられるが、他の4点は同一型式を示し、陶邑編年ではTK47に比定される。

4 まとめ

小面積の調査で終ったが、当遺跡は昭和33年に校舎が建築されたものの、地下構造は破壊を免がれたことが明らかである。

上層では中世初頭から近世にかけての掘立柱建物と井戸跡が確認され、下層では古墳時代後期の土坑が多数検出された。以下簡単にまとめておきたい。

井戸跡1から出土した黒色土器は、多数に上り、特に日常用器としては器種が碗以外に壺、甕が出土したことであろう。また碗は器体の各要素によっては細分が可能であるが、一括投棄されたものとして扱え、同一型式の範囲を示していると考えられる。黒色土器は、前述した様に平城京左京六条三坊十三坪十坑21に比定され、10世紀中葉から後半と考えられる。

(参考文献)

- 1 「天理市埋蔵文化財調査概報 昭和60年度」天理市教育委員会 1986年
- 2 1に同じ
- 3 「奈良市埋蔵文化財調査報告書 昭和58年度」奈良市教育委員会 1984年
- 4 「平城京東市跡推定地の調査 II 第4次発掘調査概報」奈良市教育委員会 1984年

4 荒蒔古墳（1・2次）——荒蒔町

1 はじめに

荒蒔古墳は、天理市荒蒔町字糸杭に計画された宅地造成のための開発申請により、当地域には周知の遺跡はないものの、当該計画地が1万m²を越えるため、試掘調査により新たに確認された。開発地内の調査については図示した通り東西方向に3本の試掘トレンチを設定した。この結果については、北側で埴輪が出土する落ち込みを確認できた以外、南2本については遺構は検出されず、遺物も出土しない状況であった。このため開発地域内の西北部について東西約50m、南北約30mの調査区を設定し、本調査を実施することが決定された。第1次調査は昭和63年9月19日に開始し、同年11月15日に終了し、第2次調査は平成元年6月5日に開始し、同年7月4日に終了した。

2 遺跡の環境

当古墳の立地する周辺では、これまで遺跡は確認されなかった。しかし、昭和58年から61年にかけて星塚・小路遺跡が調査された。ちょうど当古墳から北へ300mの地点にあたる。

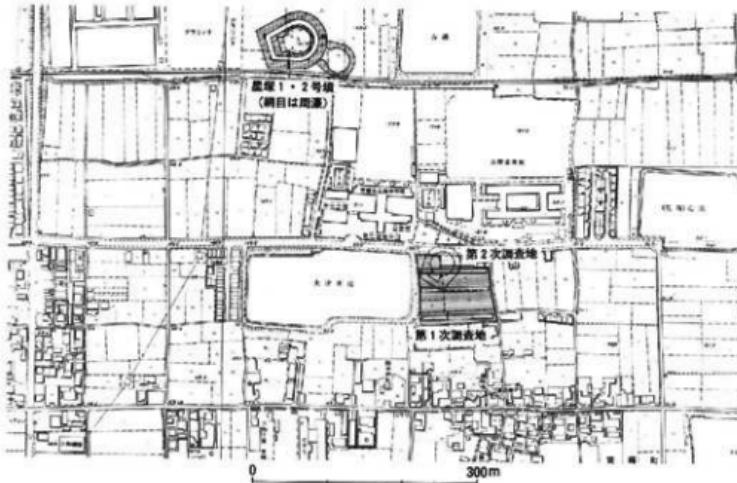


図27 荒蒔古墳第1・2次調査地点と検出遺構

ここでは周濠をもつ2基の前方後円墳が確認されたのである。1号墳は墳丘を失い、周濠の存在が確認され、全長約37mに復原される。2号墳は二重の周濠をもつ前方後円墳で、全長約41mの規模を計り、後円部は横穴式石室である。1・2号墳は出土遺物により6世紀前半から中頃に築造されたものと推定される。

さらに当古墳と道路と隔てた荒蕪墓地内には、家形石棺を利用した墓石が立っている。長さ128cm、幅112cmあり、2枚1組の組合せ家形石棺の蓋石である。どこの場所から持ち込まれたのかは不明であったが、荒蕪古墳が確認されたことで、この古墳の埋葬主体部に使用された可能性も考えられよう。

3 1次調査の概要

古墳を確認された地点は水田が耕作され、地表面には全く古墳を想起させる事物はない。

塗外における基本層序は耕土・床上を除くと地山面までの中間層である、黒灰色粘質土があるのみである。このため、地表面から約50cmの堆積土を除去すると、直ちに周濠のラインが検出された。ただ、調査区の関係で1次調査時には後円部の検出がわずかであったが、2次調査により、その東部分が検出され、全体を復原することが可能である。

古墳の規模は、全長約30m、後円部径約20m、前方部長約10m、前方部幅約13mである。

周濠部分については、前方部側では幅約6m、深さ70cmである。後円部西側では幅約14mあり、深さ1.2mである。前方部の濠外側の東西幅は約54mで周濠の形態は馬蹄形を呈し、星塚2号墳と同一形態である。主体部は、墳丘が完全に削平され地山面が露出した状況であり、早くに失なわれたものと考えられる。

4 遺物の出土状況

遺物は大半が埴輪類で占められている。しかも周濠内にあり、墳丘上に樹立していた状況を復原することは困難である。しかし、東くびれ部と、西くびれ部に形象埴輪が集中して出土し、円筒埴輪は間隔を置きながらも各所で出土した。

また円筒埴輪の整理作業により約40本以上復原されたが、その多くは最下段から残存している。形象埴輪や動物形埴輪も下部から残り、このことは、墳丘上における樹立が地中に埋没させていたのではなく、置かれた状況で立て並べられたことを想定させる。

5 出土遺物(1・2次)

大半が埴輪で占め、その種類と数量を記せば次の通りである。

人物埴輪5点以上、盾形埴輪8点、水鳥形埴輪1点、鶏形埴輪1点、双脚輪状文形埴輪1点、大刀形埴輪3点、家形埴輪3点、馬形埴輪3点、犬形埴輪1点、猪形埴輪1点、円筒埴輪40点以上である。

6 2次調査の概要

荒蒼古墳の前方部からくびれ部にかけて調査をおこなった第1次調査に続いて、第2次調査では後円部東側周濠を検出している。東側周濠の規模は幅7m、検出した深さは1.4mで、周濠内には砂層堆積が伴う上層と植物による腐食土の形成から堆積した粘土層を中心



写真1 東くびれ部出土埴輪



写真2 西くびれ部出土埴輪

とする下層に区分でき、上層では牛の足跡を多数検出している。下層堆積は周濠底から1mにも達し、その中位層からおびただしく埴輪類を検出している。また下層の中位から上位にかけてわずかであるが黒色土器や土釜などの破片が出土し、下層の上位層が10世紀頃の堆積層と思われる。しかしあおびただしい埴輪類が出土した層位は同層位の下半部にあたり、同じ環境の中で堆積した粘土層であるが層位的な隔たりが認められる。また周濠底から20~30cmでは遺物の出土が極めて少なく、古墳が築造されてから埴輪が投棄されるまでにかなりの時間的な隔たりも認められる。

出土した埴輪類は個体を保つものや原形に近いものが目立ち、埴輪底部の落ち込んだものも多い。出土状況では埴丘側に沿って転倒したものと、周濠の外周に沿って転倒したものがおり、埴輪が埴丘側と周濠外周に並べられていた可能性がある。周濠に沿うものには形象埴輪が目立つ。また外周

側では円筒埴輪に限られるが間隔をもって出土していた形跡がある。

7 ま と め

以上1・2次にわたる調査の結果、古墳の築造時期は6世紀前半から中頃と推定される。そして各種埴輪は両くびれ部に集中するものの、後円部側にも人物や動物、器材埴輪が樹立されていたことを推定できる。

しかし、小墓古墳、星塚古墳のように木製祭祀具を伴っていない古墳である可能性が強く、古墳祭祀を考える上で重要な資料といえるだろう。

(参考文献)

- 『星塚・小路遺跡の調査』天理市埋蔵文化財調査報告第4集 天理市教育委員会 1990年

5 黒塚古墳（1・2次）——柳本町

1 はじめに

天理市柳本町1114～1116番地に所在する黒塚古墳は、柳本古墳群の一画に築造され、また天理市の都市計画公園として市民の憩いの場所としても活用されている。

ところが、後円部裾部、南前方部、南側裾部が各所で崩落をくり返し、危険が生じてきた。このため、公園としての整備計画にあわせて裾部のこれ以上の崩壊を止める護岸工事の必要が生じてきた。このため工事の担当課である都市計画課（当時）と協議を重ね、古墳の裾部の発掘調査により本来の裾部を確定し、この復原を基礎として護岸のラインとすることが決定された。

しかし、調査の結果明確な裾部が検出できない調査区も見つかった。このため、この部分はあくまで推定復原ラインであることを断っておく。また護岸の施工に際しては特に後円部のアール出しに注意したが、一期工事分についてはやや不満が生じた。

また護岸法面は、墳丘傾斜を考慮した設計にはなっていない。

発掘調査は、第1次が昭和63年12月12日～28日、第2次調査として平成元年10月13日～11月2日である。



図28 黒塚古墳調査地位図

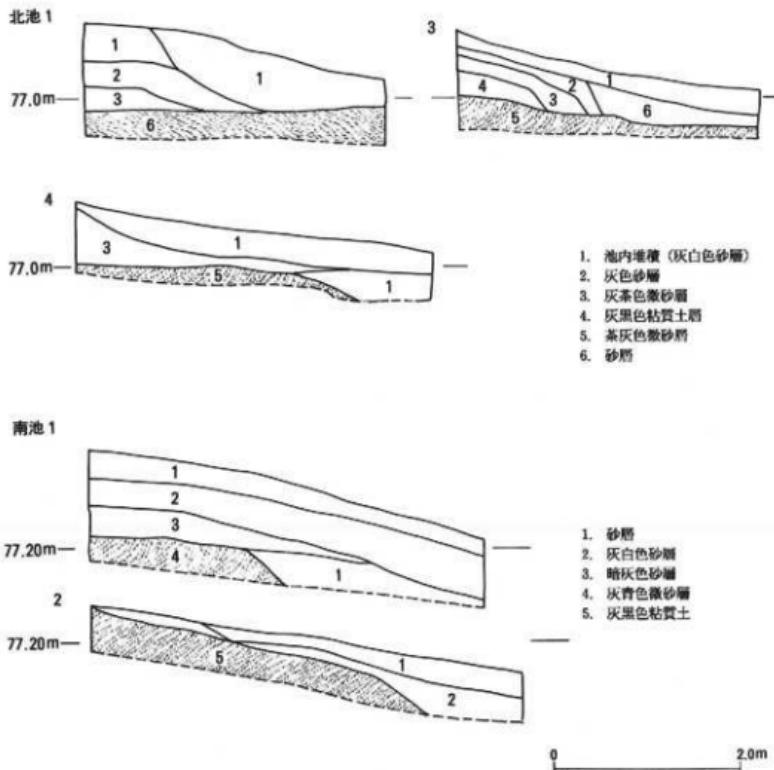


図29 北池、南池トレントン断面図（1）

2 古墳の概要

当古墳については、昭和36年には伊達宗泰氏を中心として墳丘測量と部分的な発掘調査が実施された。⁽¹⁾ この時の調査では、全長130m、後円部径75m、前方部幅60m、後円部の高さは13.5mの規模である。後円部の主体部については何ら触れられていないが、外部施設としての埴輪や葺石は確認されていない。

そして、昭和56年には再度の測量調査が今尾文昭氏らによって実施され、精密な実測と観察結果が報告された。⁽²⁾

これによると、墳丘規模は、全長127.5m、後円部径68m、高さ9.3mとなり、前方部は幅51m、高さ5mである。そして、墳丘形態は前方部が開くいわゆる撥形の形状をとるものであるとされた。

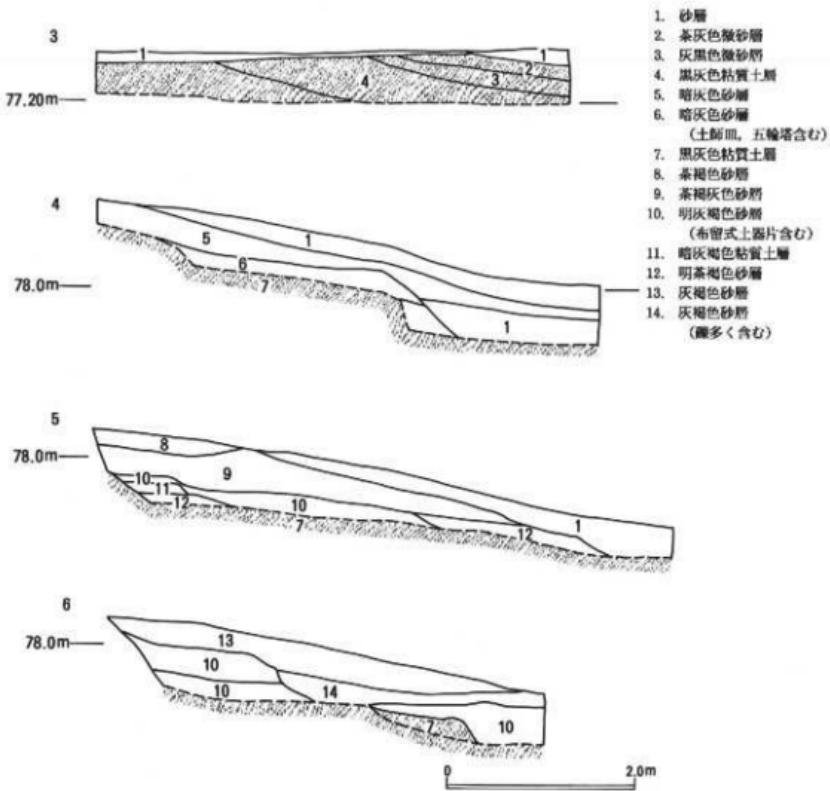


図30 南池トレンチ断面図（2）

尚この時点においても埴輪、葺石は確認されていない。

3 調査の概要

調査は主として現状の樋部より池方向に幅2mのトレンチを設定した。このため断面観察を主として本来の樋部を観察することとした。また、今回の調査では墳丘部まで立ち入った発掘を行っていないため盛土の状況は十分観察することができなかった。

また南くびれ部については調査区を拡張して面的な調査を実施した。以下において簡略ながら各トレンチについて述べたい。

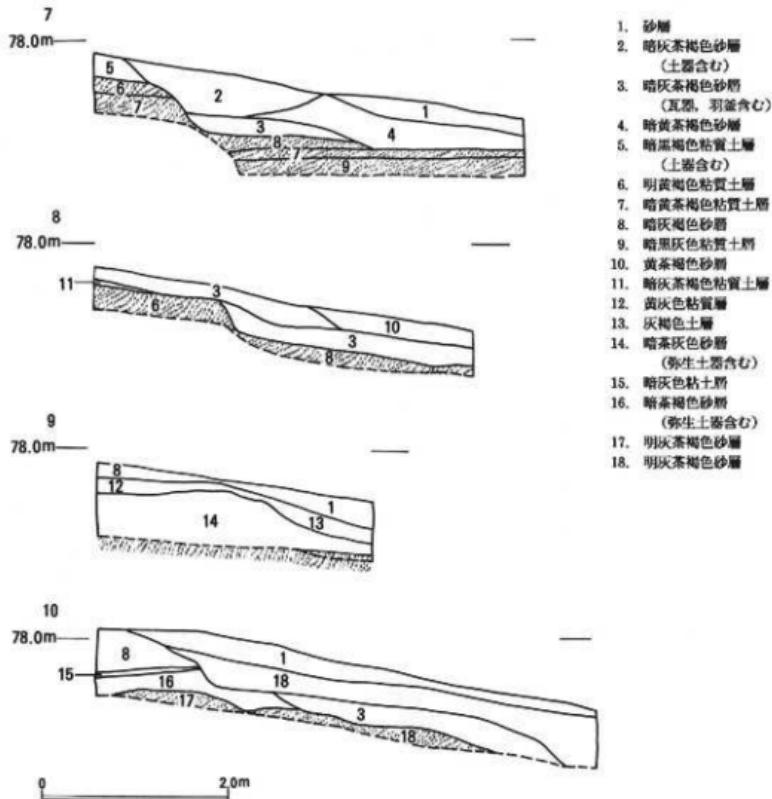


図31 南池トレンチ断面図(3)

北池

第1トレンチ(図29)5層の堆積を確認した。1層の池側の厚みのある砂層は、池内堆積上である。2層は灰色砂層であるがトレンチ端より約1mにおいて緩やかな傾斜を示すため、この部分が填丘裾部と推定できた。3層は茶褐色微砂土で盛上ないし、填丘基底部の盛土と推定される。5層は池内まで連続するため地山を形成する層位である。

第2トレンチは断面が崩落した。

第3トレンチ(図29)6層の堆積を確認した。1層と6層は池内堆積土である。また5層は第1トレンチと共に通する地山層である。2、3、4層はトレンチ端部より約1.3m池内で傾斜をつくるための盛土であろう。ただ、2・3層は砂あるいは微砂土であるのに対し、4層は灰黒色粘質土で

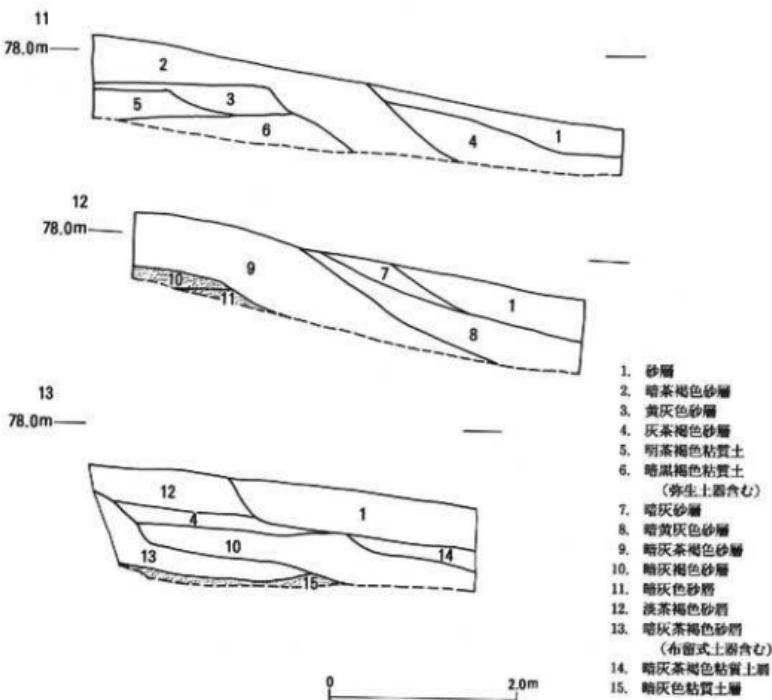


図32 南池トレンチ断面図(4)

ある。

第4トレンチ(図29)4層の堆積を確認した。この部分では、埴丘土と推定される2層目の粘質土が第3トレンチと共に通する。しかし裾部の傾斜は弱い。

南池

第1トレンチ(図29)5層の堆積を確認した。1~3層までは砂層で池内堆積である。4層の灰青色微砂土は地山面であり、裾部から1.7mで池側に急激に落ちる。裾部を形成するかは不明である。

第2トレンチ(図29)薄い砂層を除去すると地山層を検出した。地山は全体にゆるやかな傾斜で池内に落ち約3mで肩をつくっている。当トレンチにおいても埴丘裾部は確認できない。

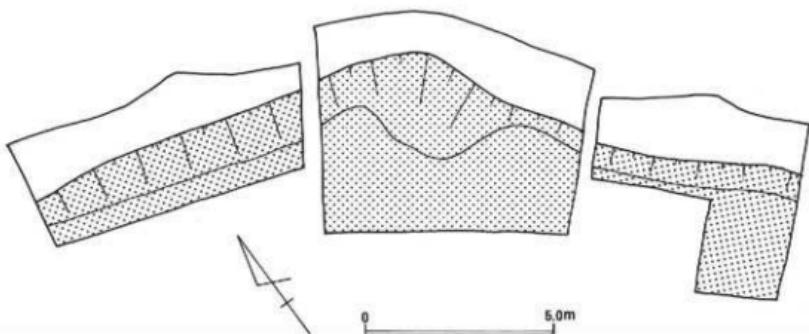


図33 南くびれ部遺構検出平面図

第3トレンチ(図30)当トレンチにおいても約10cmの砂層を除去すると黒灰色粘質土の地山面が露出した。トレンチ端部から約3mで肩をつくり池内へ落ちるが、埴丘据部は確認できない。池側の堆積も新しい時期の遺物を包含している。

第4トレンチ(図30)当トレンチは後円部南側の正面近くにあたる。4層の堆積を確認したが、トレンチ端より約1mの地点において地山のラインが肩部をつくって傾斜する。そして約2.5m幅でゆるやかな傾斜をもつ地山面があり、さらに肩をつくって池側へ急激に傾斜をつくっている。この緩斜面は本来の濠底の可能性が強い。直上の3層からは中世の土師器や五輪塔が出土した。

第5トレンチ(図30)埴丘据部から池側へ6mのトレンチを設定した。ここにおいてもトレンチ端から1mにおいて肩部が確認され、続いて穏やかな傾斜をもつ平坦面が約4m分確認された。そして上層の2層は茶褐色の礫を含む粘質土が堆積している所から、埴丘土が流失し堆積したものと推定される。そして、埴丘側で少し検出した明灰褐色砂層と暗灰褐色粘質土は盛土と推定される。

第6トレンチ(図30)当トレンチでは端部よりすぐ据部の落ちが確認され、しかも据部の成形では庄内式期の土器包含層を切断していることも判明した。部分的な検出であるが、端部の暗灰褐色粘質土層がこれにあたり、この直下は地山層である。また、池側の平坦面直上には庄内式期から布留式期にかけての土器を包含する堆積層が確認された。平坦面は3.5mの幅をもちその後は池内へ急激に落ちる。

第7トレンチ(図31)当トレンチにおいても、第6トレンチと同様に庄内式期(若干弥生土器も含む)の土器包含層を切って成形した据部が検出された。

第8トレンチ・第9トレンチ(図31, 31)南くびれ部に設定したトレンチである。この部分だけ面的な調査を行い、くびれ部の検出に務めた。この結果現況のくびれ部より約1~1.5m池側で上面のラインを検出できた。

第8トレンチの断面観察においては肩部から約30cmの落ちで濠底と考えられる。この直上堆積土内からは瓦器、羽釜が出土した。



図34 北・南池トレンチ配置と据部推定地点

第9トレンチでは約30cmで庄内式期の上器を包含する堆積土層があり、これを切って据部が形成されている。しかし、両トレンチでは埴丘土に相当する堆積土は検出していない。

第10トレンチ（図31）当トレンチでは端部より1.2mにおいて据部を確認した。この地点よりさらに池側3.5mは穂やかな傾斜をもつ平坦面をつくる。この直下の暗茶褐色砂層には庄内式期の上器を包含している。

第11トレンチ（図32）上面は暗茶褐色砂層が厚く堆積するが、約50cmで明茶褐色の締った粘質土となり端部から1.9m池側で据部を成形している。この部分においても土器包含層を検出した。

第12トレンチ（図32）当トレンチは約60cmの深さで暗灰褐色の5層が堆積するだけで明確な据部は検出できなかった。

第13トレンチ（図32）前方部西端のトレンチである。この背後には石垣が積まれているため2mの間隔を取り、トレンチを設定した。そして端部から約60cmで据部の成形を検出した。ここにおいても土器包含層を基底部としている。

また、前方部へ設定した第10～13トレンチでは盛土部分は検出できなかった。

4 出土遺物

出土遺物は大別してトレンチ調査区内における堆積土中から出土した遺物と、南池第5・6・7・9・10・11・13トレンチで検出した古墳の基盤と推定される包含層より出土した遺物に分けられる。前者においては、中世の陶磁類の破片、土師器、五輪塔が多数出土したが、第5、8トレンチより5片の埴輪片が出土した。いずれも5～6cmの円筒埴輪の破片である。第5トレンチでは底部破片で厚みは1.3cmあり、外面は粗い横ハケ調整である。第8トレンチでは、タガのある破片が3点あり、幅約2cm、高さは6cmの台形である。外面は横方向のハケ調整であるが、この内1個体は須恵質の焼成である。

今回の調査では、黒塚古墳築造以前に形成された遺物包含層の存在を確認した。出土した土器は

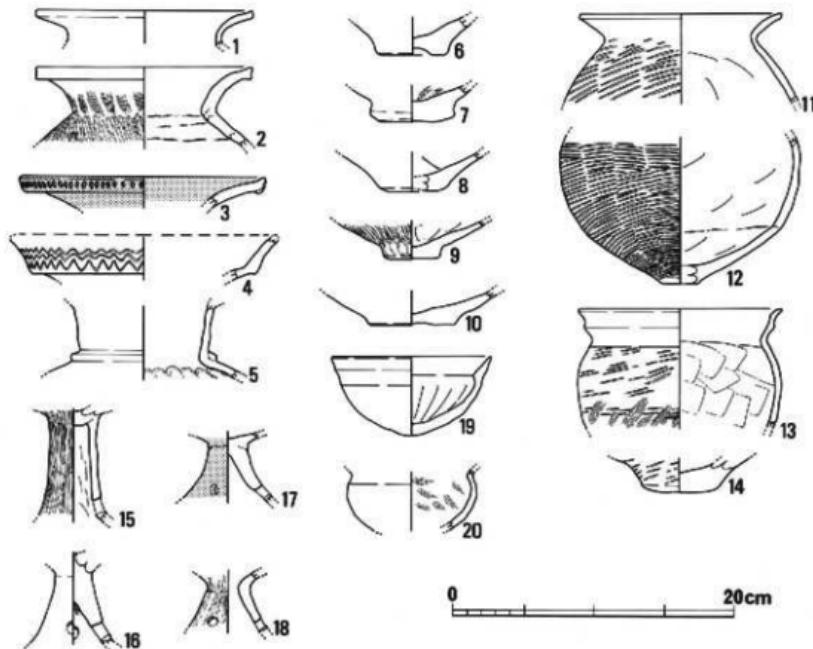


図36 包含層出土土器実測図

いずれも破片資料が中心であり完成品は含まれていない。時期幅としては、弥生後期終末～庄内式期の範囲で捉えられるが、庄内甕は人和型甕の小片が2点と微量にしか認められず、庄内式期末～布留式期初頭と考えられる小型丸底甕も1点のみが出土しているに留まり、主体となるのは庄内大和型甕出現以前の時期に限られる。また、先述の新相を示す3点の上器片はいずれも器面の摩擦が顕著に認められるため黒塚古墳の周濠埋土より混入している可能性が極めて濃厚である。以上の理由から包含層資料であるため良好な一括資料としての価値は認められないが、極めて時期幅の限定

NO	器種	色調	焼成	胎土	法量(cm)	残存率	備考
1	甕	灰黄色	良好	密	復元口径 15.1 現存高 2.3	1/8	
2	甕	黄灰色	良好	密	復元口径 15.1 現存高 5.7	1/10	
3	甕	にぶい黄色	良好	密・精良	復元口径 17.4 現存高 2.3	1/16	全面に赤色塗彩
4	甕	橙色	良好	密	現存高 3.0	1/10	
5	甕	にぶい褐色	やや良好	密	現存高 5.2	1/2	外面に赤色塗彩
6	甕	褐色	良好	密	復元口径 4.4 現存高 2.7	1/4	
7	甕	淡黄色	やや良好	やや密	底径 4.0 現存高 2.5	完存	
8	甕	灰黄色	やや良好	密	復元口径 3.4 現存高 2.8	1/6	
9	甕	浅黄褐色	良好	密	底径 3.8 現存高 2.2	完存	
10	甕	にぶい黄褐色	良好	やや密	復元底径 5.8 現存高 2.4	1/2	
11	甕	にぶい黄褐色	良好	密	復元口径 14.0 現存高 6.4	1/8	
12	甕	にぶい黄褐色	良好	密	復元底径 2.4 現存高 10.5	1/4	
13	甕	浅黄褐色	良好	密	復元口径 16.2 現存高 8.5	1/8	
14	甕	淡黄色	良好	やや粗	底径 5.8 現存高 2.4	完存	
15	高杯	橙色	良好・堅緻	密・精良	現存高 8.0	脚柱部 完存	
16	高杯	にぶい黄褐色	良好	密	現存高 6.4	脚柱部 完存	
17	高杯	橙色	良好	密	現存高 5.0	脚柱部 完存	外面全面 赤色塗彩
18	器台	橙色	良好・堅緻	密・精良	現存高 4.4	脚柱部 完存	
19	鉢	にぶい黄褐色	良好	密・精良	口径 11.2 器高 5.6	ほぼ完形	
20	小形 丸底甕	にぶい褐色	良好	密・精良	現存高 4.7	1/8	

された有効な資料として評価しておきたい。以下、黒塚古墳下層包含層出土の土器について各器種ごとに概観し、各土器の観察事項については別表にまとめた。

甕（1～10）：外反口縁と加飾有段口縁の両者が認められる。1は単純な外反口縁を呈し外面ともにヨコナデ調整される。2は外面をハケ目およびヘラミガキ調整し、内面には明瞭な粘土紐接合痕が残る。3は口縁端に面をもち刺突文により装飾される。また、内外面ともに赤彩が施される点が特徴的である。4は有段口縁の外面を山形の波状文で装飾する。5は外面のLI縁部と体部の接合部に粘土帯を巻き付けて段状に仕上げている。外面にはわずかに赤彩の痕跡が看取できる。おそらく口縁形態は有段になると考えられる。6～10の底部はいずれも外面ヘラミガキ、内面板ナデおよびハケ目で調整される。

甕（11～14）：口径が胴部の最大径より小さく下彫れの形態を呈する弥生後期型の叩き甕がほとんどである。内面調整は板ナデが主体的に認められ内面ヘラ削りはほとんどみられない。底部形態

には12のように縮小化するものと14の弥生後期の典型タイプがある。他に有段口縁で口縁部径と胴部径の比率が同じくらいで外面下半を叩き後にハケ目調整する13の甕もみられる。

高杯（15～17）：すべて脚柱部のみの破片で杯部の形態が判る資料はみられない。やや立ち気味と15と裾広がりの16・17の両者がある。どれも外面タテヘラミガキ調整が施され17のみ外面に赤彩がみられ異質である。

器台（18）：中空の小型器台であると考えられる。3方に円孔を穿ち、外面には部分的なタテヘラミガキが看取できる。

鉢（19）：外上方に粗やかにのびる口縁部と極めて小さな平底の底部をもつ小型の鉢である。内面には板ナマの原体による圧痕が明瞭にみられる。

小型丸底壺（20）：体部のみの破片資料である。内外面ともに器面の摩滅が著しく調整手法はほとんど看取できないが、内面にわずかにハケ目が残る。

各十器の山土地点は、それぞれに1・17が第5トレンチ、7・8・16・18が第6トレンチ、4・14が第7トレンチ、2・5・9・10が第8トレンチ、6・15・20が第9トレンチ、11・12が第10トレンチ、3・9・13が第13トレンチである。

以上、これらの上器の小字時期より黒塚古墳築造以前の集落が存在し、布留式期初頭まで継続するものと考えられる。同時期の集落としては、黒塚古墳の北側および東側においても確認されており（1991年天理市教委調査），黒塚古墳の時間的位置付けにはなお検討を要する。今後の周辺の調査により現状での年代観が大幅に変動するものとおもわれる。（青木）

5 ま と め

1 墓丘裾部は、後円部東側において、また現状においても墳丘の崩落が著しい部分であったが、約2.5～3.5m池側で検出された。（図33・34）

後円部南側においては1～2m池側である。くびれ部においても同様の検出状況を示した。

前方部においては、12・13トレンチにおいて墳丘側から1m以内の地点で裾部を検出した。これにより、後円部径は70m以上になる可能性が高い。前方部については従来より、前端部が開く撥形であることが指摘されてきたが、今回検出されたくびれ部より復原すると極端な開き方にはならないと判断される。

2 当古墳の築造時期については、石野博信氏は、墳丘上における採集土器から輪向2式期に想定されている⁽³⁾。しかし、今回の調査において、当古墳は庄内時期の包含層を基盤に築造されていることが明らかとなり、恐らく濠部の掘削においてこの部分の土砂が盛土に利用されたことも考えられる現状では、当該の土器資料による年代決定を考えることは困難であろう。

しかし、今回得られた埴輪片についても、これが直に当古墳に樹立された埴輪であり、築造時期

を示すものであるとともに躊躇される。

3 濠部の形状については、第4、5、6、7、10レンチにおいて、裾部から池側へゆるく傾斜しながら3.5～4mの平坦面が検出された。これらが濠底部と推定され、その形態の一部も推定する資料が得られた。

（参考文献）

- 1 「天理市柳本町黒塚古墳第1次調査」『奈良県文化財調査報告書』第6集 奈良県教育委員会 1963年
- 2 「天理市柳本町黒塚東遺跡発掘調査概報 付載黒塚古墳測量調査報告」『奈良県遺跡調査概報 1981年』 奈良県立橿原考古学研究編 1983年
- 3 石野博信 「大和平野東南部における前期古墳群の形成過程と構成」『横田健一還暦記念日本史論叢』 1976年

平成元年度
(1989年)

1 布留遺跡（豊井地区）——豊井町

I はじめに

天理市の中北部、大和高原の山地に水脈をもつ布留川が盆地へ流れ出た標高60～90mの扇状地帯には、いわゆる布留遺跡がひろがっている。豊井地区は布留遺跡でも最も東よりに存在し、ちょうど布留川が山側から盆地へ流れ出た谷の広がるところに位置している。

布留遺跡・豊井地区は県道天理環状線に伴う道路工事の調査で、縄文時代早期の包含層を検出し、奈良県でも数少ない縄文早期の遺跡と知られている。近年の調査では他に弥生時代後期から古墳時代前期、あるいは古代末期（平安時代）から中世にかけての遺構や遺物が確認されており、豊井地区の様子も多彩な展開をもつことが判明しつつある。

調査地点は県道天理環状線から100m東側へ入った天理市豊井幼稚園で、園舎の改築をおこなうことになり事前調査を実施することになった。



図36 布留遺跡（豊井地区）調査地点位置図 ($S=1/10000$) 斜線部が調査地点

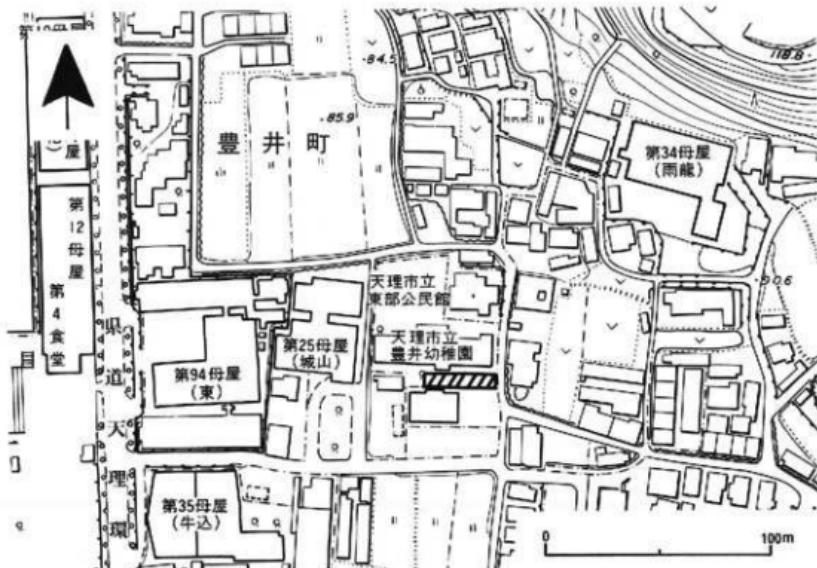


図37 豊井地区・豊井前地点調査区位置図 ($S=1/2500$) 斜線部が調査地点

II 調査の概要

(1) 基本土層

標高88mの豊井幼稚園は、盆地東部の丘陵地帯と布留川が盆地へ流れ出した扇状地との境目に位置し、山側から平野に向かって比較的斜面のある地形になっている。そのため幼稚園を築く時点で本来の地形を削平して平らな校庭を造成している。調査では、地形が高くなる校庭の東側と平野に面する西側とでは土層に違いがあり、西側の方に包含層がよく残っている。調査は校庭の東側でおこなったため幼稚園の西側については十分な検証をしていないが、今回の調査である程度の様子が理解できたのでまとめておく。

校庭の東側では、グランドを整備した際に盛土で校庭の表土を作り上げている。しかし表土の直下20~30cmで基盤層が出土し、弥生時代から以降の遺構検出面になる。ところが調査区の西側では、表土(盛土)の直下に黒色土が残り、弥生時代後期から古墳時代にかけての遺物が含まれる包含層が遺存している。黒色土は本来校庭の東側でも残っていたはずであるが、グランド整備の時点で地形の高くなる東側を削り込み、その際に基盤層とそれに伴う遺構が露出したものと思われる。

調査の基盤層は砂礫を多分に含む土壤が目立ち、ブロック状に細砂層がみられる。県道天理環状

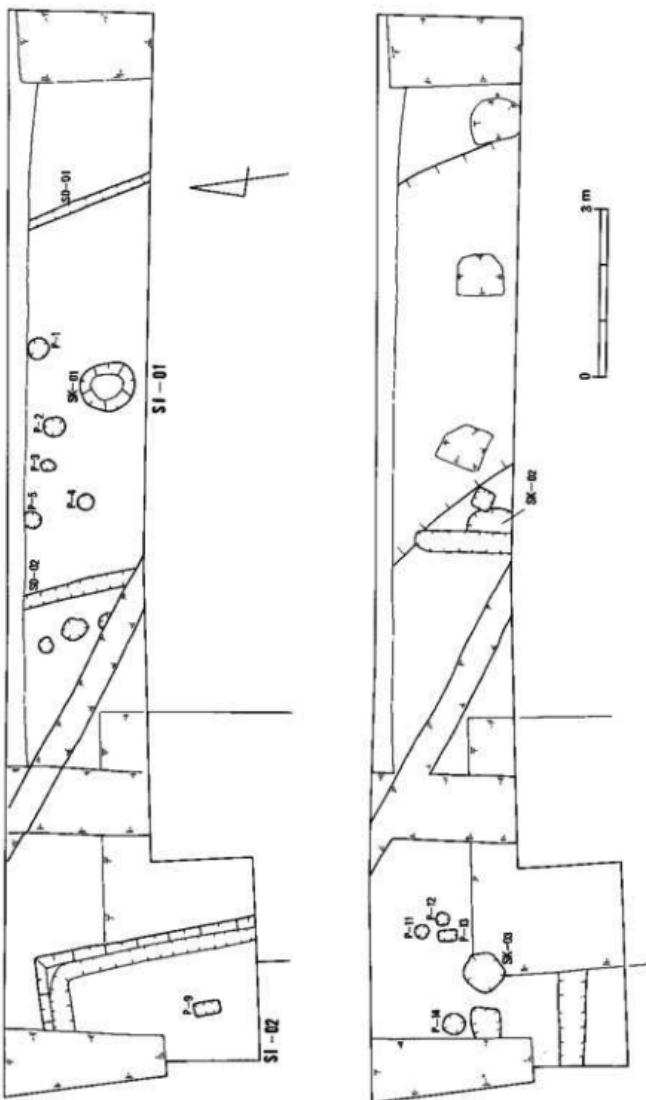


図38 遺構平面図 ($S = 1/100$)

線の工事に伴う調査で確認された縄文早期の包含層は、こうした基盤層中に含まれているような細砂層であったため調査の段階で基盤層の断ち割りをおこなった。現状では縄文早期の遺物を検出できなかった。

(2) 遺構・遺物

調査区は、校庭の南側に接する地点で東西19m、幅2.5mで設定し、遺構の検出をおこなった。

1) 弥生時代後期～古墳時代前期

弥生時代後期から古墳時代（庄内期）にかけての住居跡を2棟検出した。

S I -01 調査区の中央から東半部にかけて検出した堅穴住居跡である。検出地点は削平をうけているため表土層の直下が既に基盤層になる。そのため住居跡の壁面は残っておらず、床面を直接検出した。また調査区が狭く住居跡のプラン全体を検出していない。しかし幅20～30の小溝SD-01とSD-02がほぼ平行して区画されており、その中央部に炭化物が多量に含まれているSK-01の炉跡を検出したことから堅穴住居跡であることを確認した。SK-01に接して検出したP-1～5は、住居跡に伴う柱穴と思われる。S I -01の規模はSD-01とSD-02との間隔がおよそ6.5m程あり、堅穴住居としては中型クラスと思われる。

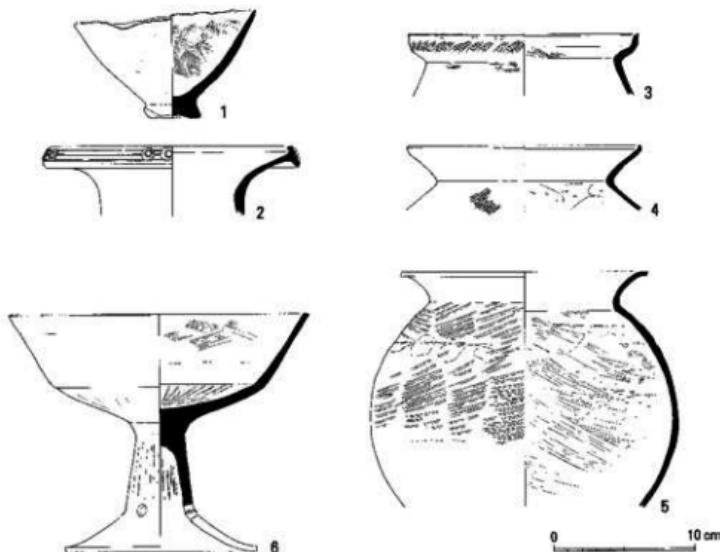


図39 住居跡出土土器 (S=1/4) 1～2 S I -01出土, 3～6 S I -02出土

時期はSD-02から完形の小型鉢（図39-1）が出土しており、土器の特徴から弥生時代後期（大和第VI様式）から古墳時代初頭（庄内期）頃と推測され、さらに住居跡のプランが既に方形住居になっていることから検討して弥生時代後期末（大和第VI-3様式）以降と考えられる。

SI-02 調査区の西端部で検出した堅穴住居跡である。遺構の残りはSI-01に比べて比較的良好で、検出面から深さ30~40cmで床面を検出し、住居に伴う壁面も検出している。規模は不明だがSI-01と同じ程度と思われる。検出した住居の北東隅では住居に伴う側溝の上面から上器が数点一括出土している（図39-3~6）。出土した土器は住居に直接伴うものはないが、廃絶した時点での遺構内に捨てられたものと思われる。

時期は一括出土した土器の中に庄内期の甕（図39-5）が含まれており、廃絶した時期が古墳時代初頭より以前と推測できる。SI-01とほぼ同じ時期に作られた住居と考えられる。

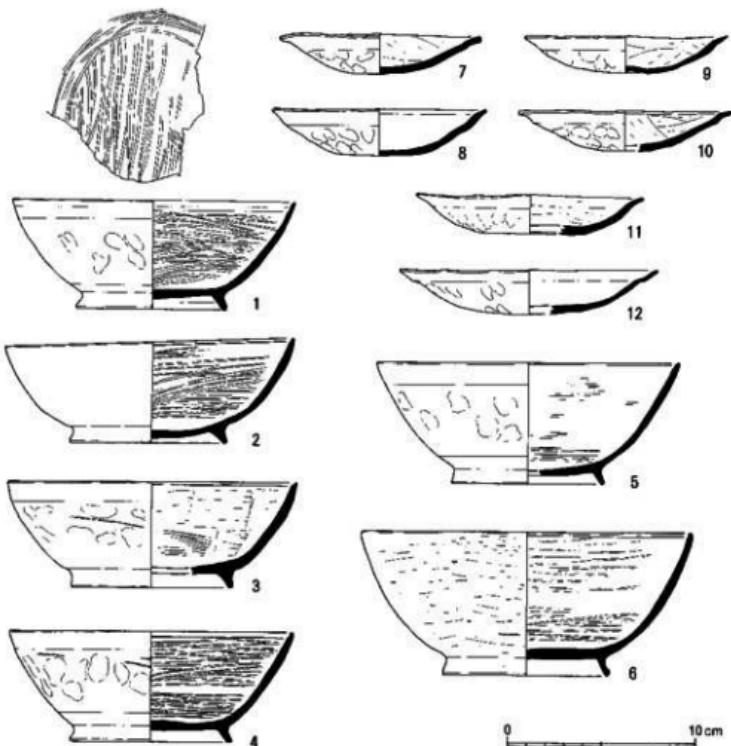


図40 SK-03出土一括土器（S=1/3）

2) 平安時代(後期)

調査区の西端で検出した住居跡S I -02の直上で、いくつかのピットと土坑を検出している。遺構の性格は不明だが、SK-03から黒色土器と土師皿数点が一括出土し、平安時代後期(10C末~11C前半)の遺跡が存在する。

時期はSK-03から出土した黒色土器B類(図40)が混じり、高台に発達が目立つ特徴や、共伴した土師皿のいわゆる“て”字状口縁のものに限られることなどから推測して10世紀末から11世紀前半頃の遺構と思われる。

同一番号	器種	口縁部	口径	胸部外面	器高	脚部内面	足込み	底部高台	径高さ	色調
40-1	黒色土器 椀A類	内側に幅広い 沈線を施す	14.9	指圧とナテ仕上げ 口縁部ヨコナデ	5.8	ヘラミガキ	4.75	平行線状の ヘラミガキ	7.9 0.8	暗褐色
〃-2	〃	内側に細い 沈線を施す	15.2		5.4	ヘラミガキ	4.7		8.2 0.9	明褐色
〃-3	〃	端部に沈線 を施す	15.3	指圧とナテ仕上げ 口縁部ヨコナデ	5.6	ハケとナテ仕上げ	4.6		8.6 0.9	暗褐色
〃-4	〃	端部に沈線 を施す	15.0	指圧とナテ仕上げ 口縁部ヨコナデ	5.9	ヘラミガキ	4.8		8.5 0.8	〃
〃-5	〃	端部に沈線 を施す	16.0	指圧とナテ仕上げ 口縁部ヨコナデ	6.5	ヘラミガキ	5.7		8.0 0.8	〃
〃-6	黒色土器 椀B類	内側に沈線 を施す	17.5	ケズリ後ミガキ仕上げ	7.7	ヘラミガキ	6.2	ミガキ	8.8 0.8	黒褐色
〃-7	土師皿	て字状	10.8	指圧仕上げ 口縁部ヨコナデ	2.1	ナデ	1.7			淡褐色
〃-8	〃	て字状	11.6	指圧仕上げ 口縁部ヨコナデ	2.6	ナデ	2.2			〃
〃-9	〃	て字状	10.9	指圧仕上げ 口縁部ヨコナデ	2.0	ナデ	1.7			淡褐色
〃-10	〃	て字状	11.5	指圧仕上げ 口縁部ヨコナデ	2.2	ナデ	1.8			淡褐色
〃-11	〃	て字状	12.2	指圧仕上げ 口縁部ヨコナデ	2.1	ナデ	1.6			暗褐色
〃-12	〃	て字状	13.8	指圧仕上げ 口縁部ヨコナデ	2.4		1.8			明褐色

表1 SK-03出土土器観察表

III まとめ

近年、布留遺跡・豊井地区の様子が鮮明になりつつある。この概要是昭和63年4月におこなった調査であるが、平成2年度から実施されている豊井地区の調査では縄文時代早期の土器が多量に出

土し、中世後期の館跡が判明するなど興味深い成果があげられつつある。特に弥生時代後期末から古墳時代前期にかけての堅穴住居跡が検出されており、この概要で報告しているST-01・02との関わりにおいて豊井地区一帯には弥生時代後期末から古墳時代前期にかけての集落が存在していたようである。

また調査で出土した黒色土器を含む一括資料の性格については遺構の特徴が明かでないため不明であるが、豊井地区ではこれまでの調査でも黒色土器が出土しており、平安時代の遺構が重複していることは確かである。

2 在原遺跡（第4次）—石上町

1 はじめに

在原遺跡は、石上町に存在する在原神社（在原寺跡推定地）を中心とする遺跡であり、これまで3次に及ぶ調査を実施した。

4次調査は、天理市石上町字北浦570-1に所在する。当該地は市土木課による事業地にあたり、このための事前調査を平成元年11月16日により平成2年2月3日まで実施した。同課の事業地面積は約1500m²であるが、このうち、南1/3程度の約500m²を調査対象区として設定した。

2 調査の概要

遺構面までの層位は耕作土・床土を除去すると中間層の茶褐色砂質土が覆い、その直下は灰黄色砂質土の地山が露出する。南方では礫石を多く含み、遺構の検出が困難であった。地山面までは、表土より約30~50cmの深さである。

検出できた遺構は、溝2か所、土坑8か所である。この内、遺物が出土したのは溝1と土坑1の



図41 在原遺跡調査地（第4次）

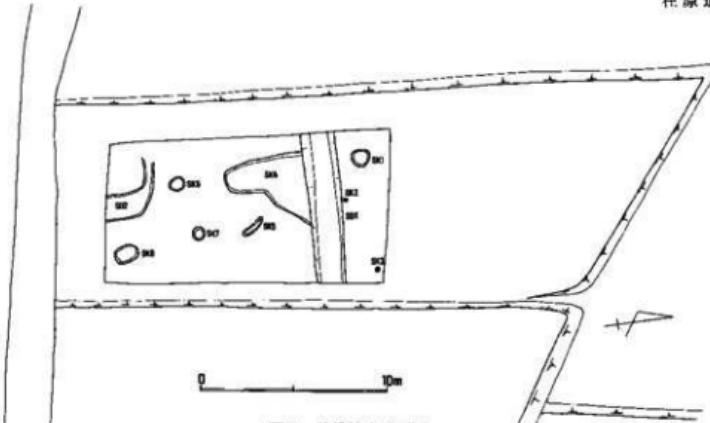


図42 遺構検出平面図

みであり、他は無遺物であった。

溝1 調査区北端から南へ約5mの地点で、東西方向に流路をもつ。溝幅は約3mあり、深さは東側では10cmであるが、西では約50cmである。溝内の堆積状況は、灰黒色粘質土が埋積している単純な層位が見られる。布留式土器の破片が中心であり、量も多くはない。

溝2 調査区の南端で検出した。L字状に折れ曲がり、幅は1~2.2mである。

土坑1 溝1の北側にあり、直径約2mの円形を呈する。深さは約15cmである。土師器鉢、小形丸底壺の破片が少量出土した。

土坑2・3は直径30cmの小土坑である。土坑4は不定形を呈し、溝1によって切られている。時期の判明する程度の大きさの土師器は出土しなかった。

土坑5は長さ2.5m、幅70cmの長楕円形の土坑である。土坑6は直径約1.5m、深さ約1.3cmの円形を呈する。土坑7は直径約1m、深さ約19cmの円形を呈する。土坑8は長径2.5m、短径1.5mの楕円形を呈し、深さ約11cmである。

3 まとめ

今回は昭和59年に調査を実施した、第2次調査地の北側に当たる。この時の調査も土坑が検出され、布留式土器が出土した。

今回の調査において遺構の広がりが期待されたが、濃密な状況ではなく、散在的な状況であることが判明した。

しかし、溝1は良好な状態で検出され、あるいは、当該時期の集落の北限を界する溝の可能性も指摘されよう。

3 小墓古墳（第2次）— 桜之内町

1 はじめに

天理市桜之内町元山口方29番地に所在する小墓古墳の調査は、昭和62年に濠部北側の約1000m²を1次調査として実施した。そして、第2次調査として南側約840m²を調査した。

調査は平成元年3月14日から同年8月23日に終了した。また調査の途中に、浄水場用地の東隣する水田の工事中に土器の散布が確認された。このため、同地を小墓遺跡と仮称して、平成元年5月2日から5月22日において約127m²を調査した。何分工事中であった関係上十分な調査ができず問題を残す結果となった。

2 調査の概要

小墓古墳 調査は東側くびれ部から前方部にかけての地点である。調査地の都合により2回に分けて実施した。

くびれ部は、裾部のごく一部分の検出に留まり、大半は調査の西側に掛かる模様である。

前方部側では、前方部端部付近で側辺の裾部を検出した。この地点では墳丘部の約4mが削平を



図43 第2次調査位置図(網目)

受けている。

周濠の外側肩部は、当初、現在の水田畦畔を踏襲しているものと予想されていたが、調査区南端では、西側へ約10m内側で検出された。このため前方部東側における南端部での濠幅は約18mである。

また濠内の調査では前回の調査と同様に柱材を入れた掘形を3か所で検出された。

出土遺物 濠内から出土した遺物は、埴輪と木製品である。埴輪は破片が多く整理箱で約200箱程度である。今回の調査では蓋形埴輪が7個体以上出土した。蓋形木製品は25点あり、他に板状、柱状材の木製品で総計83点である。

3 まとめ

1・2次調査を通じて、小墓古墳の東濠部は80%近くを行うことができた。今回の調査では、くびれ部が部分的な検出に留まつたものの、前方部の側辺裾部と、濠外側肩のラインを確認するに到り、古墳全体の復原のための資料が得られたものと思われる。

出土遺物では新しい種類を追加することはできなかったものの、蓋形木製品は後円部から前方部にかけて片寄ることなく万遍なく出土する。1・2次の合計は90個体

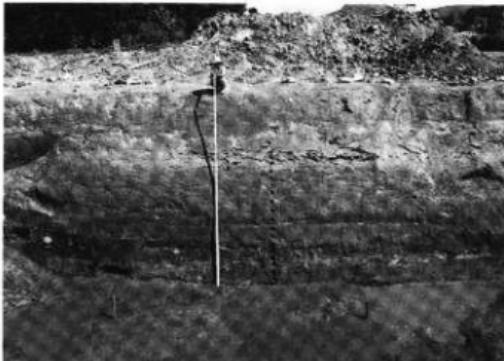


写真1 濠内堆積



写真2 蓋形埴輪と蓋形木製器



写真3 濠内柱出土状況

である。

埴輪製品では、前方部において蓋形埴輪が集中して検出された。当古墳における埴輪樹立の復原を推定する上で重要な知見を得ることができた。



1. 調査区全景（北方より）



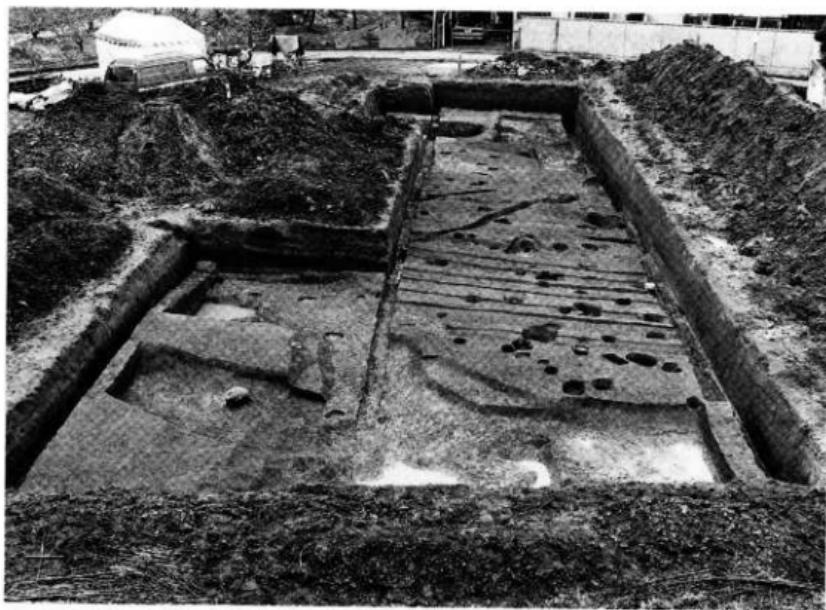
2. 石垣と土堀遺構



1. 土塁遺構とSD-03溝（西方より）



2. 土塁南側の遺構（西方より）



1. 調査区全景（北方より）



2. 調査区全景（南方より）



1. 素掘り溝遺構（南方より）



2. SD-01・03 と SD-02・04 遺構（南東より）



1. 井戸SE-01 検出状況（西方より）



2. 井戸SE-01・井戸枠



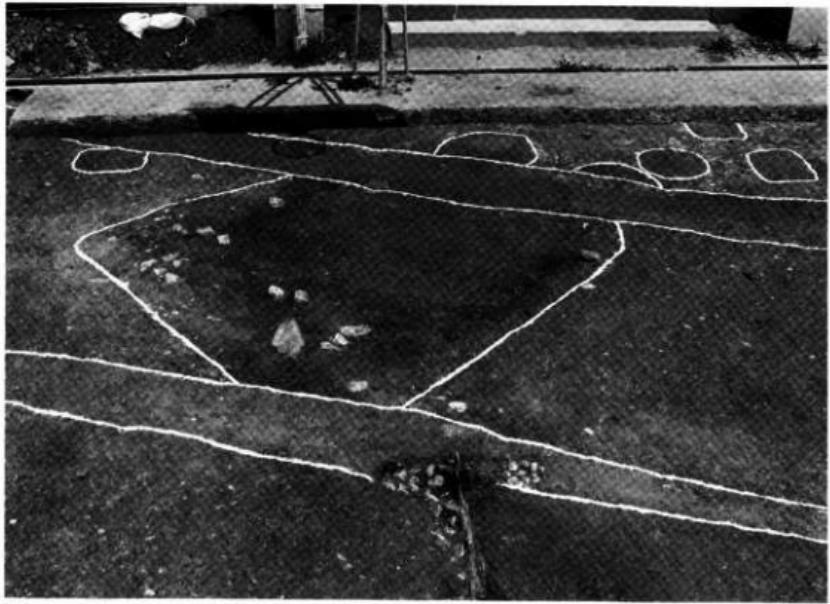
1. SK-04 検出状況



2. SK-04 上層出土土器



1. 上層遺構（西より）



2. 井戸跡1（南より）



1. 井戸跡 1



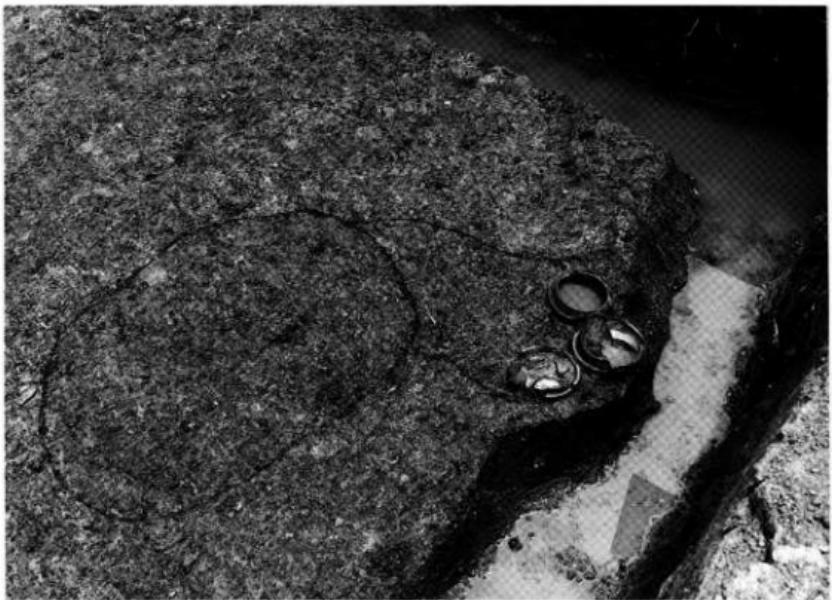
2. 井戸跡 1



1. 下層造構検出状況（西より）



2. 下層造構検出状況（西より）



1. 土 坑 1



2. 塗輪片出土状況

図版 11 別所遺跡 井戸跡 1 出土土器(1)



1



2



3



4



6



7



8



9



10



11



12



13



14



16



18



19



21



23



25



26



28



30



31



33



34



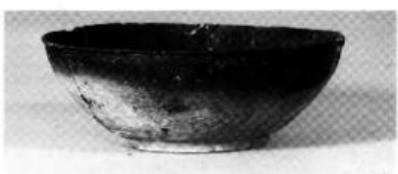
35



37



39



40



41



43



44



45



46



47



52



53



54



55



56



57



58



59



1. 調査前状況（北より）



2. 遺構検出状況（西南より）